

特100

編一第書叢明文

325

園樂

著袋花山田



始



持100
325



文明叢書

第三十一篇

大正
3. 10. 29
内交

文明叢書發刊の辭

獨にレクラム叢書在り。英にカツセル叢書あり。佛にネルソン叢書あり。皆世界百科の書を網羅し。内容の充實と價格の低廉と相まちてあらゆる階級の讀者に布遍し、各國知識の開發者たると共に世界文明の指導者たり。而して今迄我日本に此の種の叢書の出づべくして出でざりし事は實に出版界の缺陷にして又實に吾が文明の缺陷なり。小院技に見る處あり、今や乃ち「文明叢書」の出版を企て、最善の力を之に致さんとす。希くば賢明なる讀者の深厚なる同情によりて、叢書の篇を重ねるに隨ひ、我が同胞に各月に最も完全にして最も便利なる圖書館を建設するを得んか。

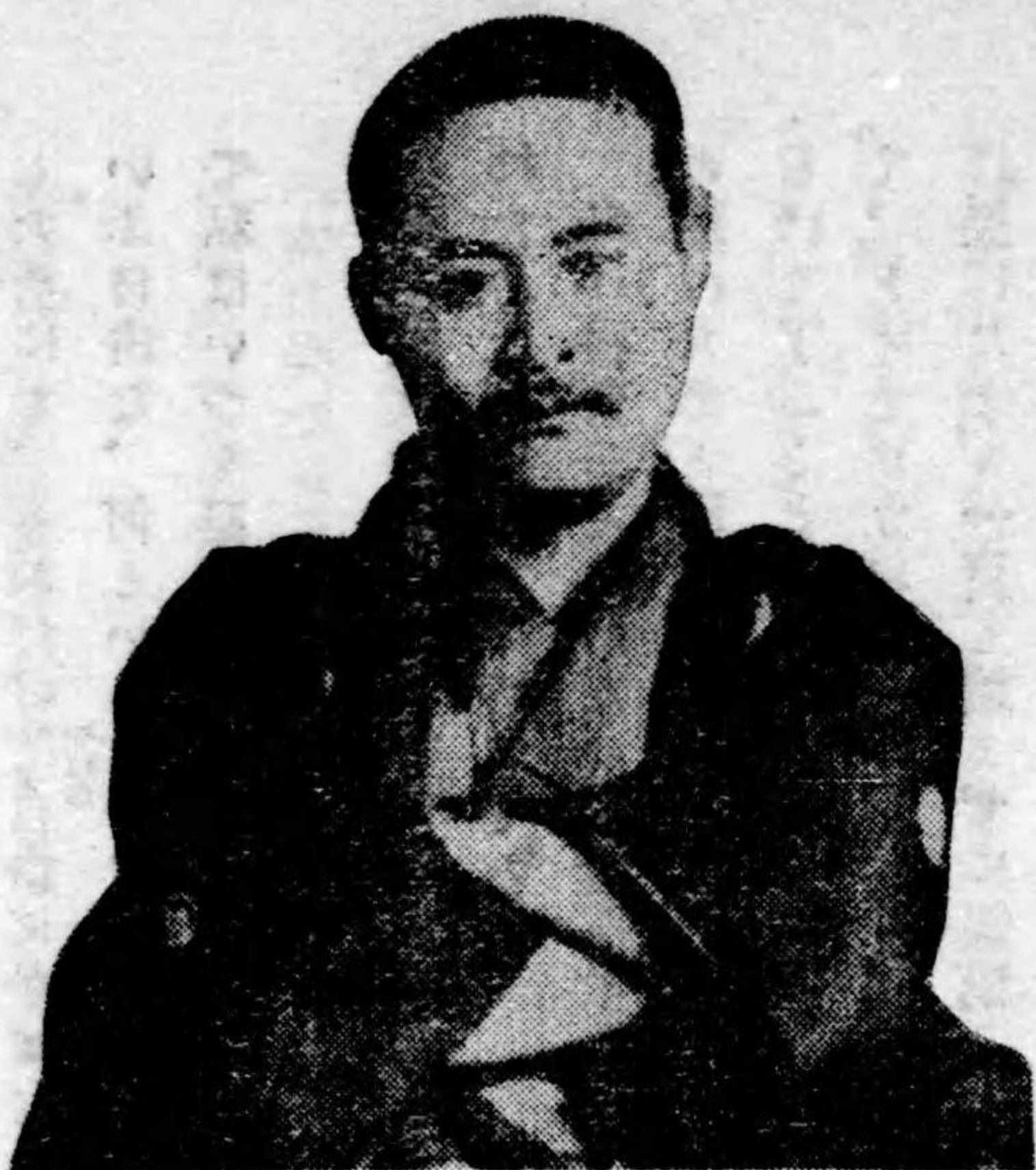
發行者謹白



樂園

田山花袋

樂園……………一
 胡爪……………四三
 劇場で……………五五
 あの女……………七五
 椿の花……………八五



楽園

私はいつも土曜日に出かけた。私に取つては、暫くの間は、其處は隠れた樂園のやうなものであつた。新築の家のところどころに立つてゐる郊外の島の中を、電車は全速力を出して駛つて行つたが、それさへ、私には遅くまどろく感じられた。其間にある乗換の場所などでは、殊に待つてゐる時間が長く長く思はれた。車掌が控所で平氣で話をしてゐるのがいつも焦々と私の癢に觸つた。

「今日はすれ違ふ電車が來なくなつて、三十分も待たされた。……歸つて了ひやしないかと思つて、氣が氣でなかつた。」

私がかう言ふと、

「歸りもしないけれど、随分遅いと思つてゐたわ。」

女はかう言つて笑つた。

女は紋羽二重の被布を着てゐる時があつたり、お召の意氣な羽織を着てゐる時があつたりした。背の高い、すらりとした、何處か一種の女の矜持を持つてゐて、いかに自分の愛した男にも、それだけは自由にさせないといふやうな處があつた。それでゐて、まあ、何といふ自由な、何といふ柔かな、何といふ男の心を奪ふことの巧みな女だらう！ かう思つて私はいつも凝と女の顔を見た。

女を離れて居る間の方が女と一緒にゐる間よりも一層私を楽しませた。それほど種々な隠れた心の抑揚を女は持つてゐた。

私は書齋にゐる時だの、野を散歩してゐる時だの、飯を食つてゐる時だのに、よくその女の隠れた心と隠れた態度とに邂逅して、喪心した人のやうにわれを忘れてその幻影に捉へられて了ふことがよくある。友達と話しをしてゐて、途中で、ゆくりなくそれに捉へられて、トンチンカンの挨拶をして、友達を驚かしたこともよくある。机に向つて、書籍を前に展げたまゝ一頁も讀まずに恍惚として一日を暮して了ふことなどある。何といふ惑溺だ

らう。何といふ女の方だらう。私は私の心も私の體も絶えず女に向つて傾いて偏つてゐるのを感じずには居られなかつた。

「これは何うするの？」

「知らなう」

「知らないことなんかなしだアイン。」

「本當に知らない」

「さう、本當に……」

(女は笑つてゐる)

「ぢや教へて上げませうか」

「あゝ」

其時、下座敷で、あの下ぶくれの、可愛い眼附をした娘の笑ひ聲がした。下からさした電燈の餘光が二階の階梯の上のところに微かに揺いてゐる。烈しい薔薇の匂ひが闇の中にした。

下ぶくれのその可愛い娘！ それを私はその時眼の前に明らかに浮べてゐた。不思議な心持だ。烈しい戀に捉へられながら三つにも四つにもわけられ得る不思議な心を私は見て

めた。娘の笑聲が絶えず聞えて来る……。「お戯談ばかり仰しやつて……」かう言つて顔を赤くして笑つてゐる顔が闇の中に……。

私は女と一緒に始めて此町に來た時のことを思ひ出してゐた。

「何處か好い處がないだらうか」女も私もさう思つてゐた。「誰れにも知れないやうな……静かな隠れ家」私達は彼方此方をさがし廻つた。人目の餘り煩くないやうなところを私達は五日も六日も探した。

一週間に一度ならば、人に知れないやうに、何ういふことでも出来る。女はかう思つてゐるらしかつた。女に地位があり、名譽があり、幾人かのラバーがあり——曾て一度嫁いてそしてすぐ別れた夫があることを私は知つてゐた。思ひもかけない握手——それから無数の思ひもかけないやうなことが續いた。私は女が段々に開いて見せて呉れた世界を唯々驚いて見てゐるやうな人であつた。と、女は「何うかしたの？」かう言つて私を呼び覺した。

何處にもそれに相應したやうな好い家屋はなかつた。一度は郊外に行つて、新しい家を借りやうとして見たが、何うもそれではすぐ人に知られさうに思はれた。寧ろ都會の雜沓

の中の方が好いかも知れないと思つて、私は細い巷路や、溝に添つた新道や、三味線の音の聞える横町などをさがし廻つた。私はふとある二階の一間をさがし當てた。これこそお跳通りだと思つた。これほど都會の真中でそして世離れた家はないと思つた。それは細い通りを奥深く入つて、ずつと突當つたやうな位置にあつた。一緒に行かうと言ふのを、女は發見されるのを恐れて、獨りて見に其處に行つた「あんな汚い處……二階から、下の溝を見て？」女はかう言つてすぐ否定して了つた。成程、其處には大きな堀割があつて、黒い汚い水には、猫の頭だの、犬の死んだのだの、たわしだのがぶよぶよ浮いてゐた。「それにあんなに、じろくく人の顔を見るやうな男のゐる家は駄目ですよ」女はかう言つた。

ある秋の晴れた日だつた。私達は降りるともなくこの町の停車場で下りた。「此處等が一番好いんだけど……電車があるから、すぐ來られるし、此處等まで來れば人の眼も惹かないし」私達は話し合ひながら歩いた。

ふと、「二階貸間」といふ白い札が眼に着いて胸は躍つた。私は其二階屋——小間物屋を間接に知つてゐた。其處には下膨れの可愛い娘がある筈だ。此前唯一度此町に來たことがあつたが、其時、娘は店頭に座つてゐて、恥しきやうな顔をして、私の手に敷島を一つ渡した……綺麗な娘があるな……かう思つて通つたその二階家だ。

室も綺麗で、眺望もあつて、空気の流通も好くつて、それに二間つゞけて貸して呉れるといふことも女の氣に入つたが、それよりも家内が母親と娘きりで、その母親がまた人の好い親切なそれでゐて何も彼も飲込んでゐるらしいので、それが一番女の決心を固くした。で、私達はその二階二間を借りることにした。

其時、女は何ういふ扮装をしてたらう。さうだ。髪を束髪にしてシミなお召か何かを着て、コートを着てゐた。娘は驚いたやうな顔をしてその指にはめたダイヤのキラキラ光るのを見てゐた。

女は母親に言つた。

「家が少しゴタゴタしてますから、少し静かに勉強したいと思ひまして」

「え、え、此處なら、静かですから、いくらでも御勉強が出来ます」

「ぢや、これからいろ／＼お世話に」

「え、え、行届きませんけれど、娘と二人きりですから、それはもう静かで御座いますから」娘は母親の後に立つて見てゐた。

八疊に六疊の二間！ 今まで工兵の若い士官夫婦のゐた其二間！ 私達は段々そのかく

れ家に種々なものを運んで來た。六疊には長火鉢を据ゑた。八疊には、卓、椅子、水彩畫、卓の上には洋書五六冊、インキ壺、ペン、薔薇の鉢植。西日の當る時には、カーテンを引くやうにした。

程な女大きな女の肖像……

その大きな肖像の眼が、微笑を含んで絶えず此方を見てゐた。女の冴えた艶な眼と肖像の女のその微笑を含んだ眼とは、常に二つ重り合つて、一方を思ひ浮べればすぐ一方がその後から續いた。何も彼も知つてゐるその二つの眼だ。

そればかりではなかつた。その女の肖像畫は、女に取つては忘れられない記念らしかつた。その肖像畫のかけにゐる男は誰？ 前の夫かそれとも一度關係してそして切れたラバ一か、それとも今も猶つゞいてゐる戀人か。その肖像畫の女は、何處かで、私と女とが今送つてゐるやうな生活を見たことがあるに相違なかつた。……その微笑は何を笑つてゐるのか。

ある日その話を私がすると、

「一生の私の友達よ、その額の女は！」

かう女は笑ひながら言つた。

「かういふ生活を、また何處かで、——何處か違つた室で見るだらうね、この額の女は？」

「さうかも知れない」

女は笑つてゐた。

「僕に呉れませんか」

「何うして？」

「何うしても……」

「私の一生の友達だつて言ふのに……」

「だから下さいつて言ふんです」

「何故なの？」

「一生、貴女についてゐて、いろんなことをあの微笑を含んだ眼で見てゐないやうに……」

女は黙つて笑つてゐた。其時であつたか、それともそれから一月二月を経つてからだつたか忘れたが、女は、「男の嫉妬つておかしなものね」と言つて私の顔を見た。

その時の眼色が今も眼の前にある。

私の眼の前には、赤と紫と白とをくしくつたく、り目が際立つて見えてゐた。それは皆な

縮緬の断片を集めて縫つたやうなものであつた。

黒い髪が流るゝやうに、寧ろ潮の寄せて来るやうに……

私は停車場を出ると、急いで、その突當りの二階家に行つた。

娘が大抵は其處にゐた。にこにここと笑つてゐるその笑顔で、女は来てゐるか、まだ来てゐないかといふことがすぐ解つた。「待つてゐらつしてよ」など言ふこともあつた。ある日遅くなつて、灯のつく頃行くと、若い工兵の士官が三人ばかり、店で娘を取巻いて、いろいろなものを見せて貰つて買つてゐた。瓦斯の青白い光が娘の襟首のところを流るゝやうに落ちてゐた。

何方かと言ふと、女の来てゐる方が多かつた。女は別の電車で来た。私は階梯に音を立て、上つて行くと、女は卓の上で、椅子に腰をかけて書など読んでゐた。林檎やバナ、やオレンヂなどがその上に轉つてゐた。

女はナイフでそれを剥いて半分にかけて呉れた。

室には電気と瓦斯と兩方とも来てゐた。「何うも瓦斯は厭ですれ、瓦斯をつけると、何處となく氣がふさいで来るんですもの」かう言つて女は瓦斯を消して電氣をつけたりなどし

一週間に土曜日一日、それ以外には、女の生活は廣い世の中のものであつた。私は段々それに飽足らなくなつて來た。

「あれから何うしました？」

「あれからツて？」

「前の週間に——」

「何も變つたことはありませんよ」

「でも……少しは話して聞かしてくれてもいいでせう？」

「何にもないんですもの」

かうは言ひながらも、其週間に、自分の家に訪れて來た男の友達のことだの、女の友達のことだのを話した。それを私は細かく手繰り寄せて考へた。

手繰り寄せて——實際さうだ。それに、女は熱い心を見せて居りながら、しかも、もう若い娘のやうに熱した態度を示さなかつた。

「そんなことは何うでも好いぢやないの？」かう言つて笑つた。

私はいろいろな日と、日に由つて起つたいろいろな感じとを味つて來た。秋はもう暮れ

に近かつた。林の楢の葉や、柞や、漆などは紅葉して、路傍の草叢には赤い小さい實などが見えてゐた。北へ向ふ汽車は、日毎に停車場に來て、白い烟を颯げて通つて行つた。

西の窓に當る夕日の金色の中に、私と女と黙つて座つてゐることなどもあつた。汽車の音は絶えず前を掠めて行つた。「何處か遠くへ行つて見たい——」かう女が言つて、窓をあけて見た。

六疊の方の高窓からは、停車場がすぐ正面に見えてゐた。包を持った旅客が入つて行つた。時には、車掌や助役が此方に向つて歩いて來た。夕飯を近所の官舎に食ひに行く驛長の姿なども見えた。

ついぞ泊つたことがなかつた。何んなに遅くなつても、最終の電車には、女は屹度歸つて行つた。私も大抵は一緒に歸つたが、何うかすると、「僕は泊つて行く」かう言つて一夜を其處に明すことなどもある。柔かい、人の神経をそしちやうな女の匂ひは、女が歸つた後でも、依然としてその一間に残つて何とも言はれないなつかしい空氣を四邊に漲らした。

私は何故かその女の歸つた後の一間の空氣に段々捉へられて行つた。女を送り出して——夜の晴れた時には停車場まで送り出して、そして歸つて來て、一間の中に入つた時の

心持は、何とも言はず静かな落附いたものであつた。それに、私は大抵は疲れてゐた。女の肌の暖味の残つてゐる床の中で、熟睡した。

私はよく泊つて行つた。

しかし、女に取つては、これが快くないらしかつた。泊つて行く理由を度々私にたづねた。思ひもかけない嫉妬を浴せかけられたこともあつた。

「あの娘は駄目ですよ」

こんなことを言つた。また、或時は「あの娘は、もう處女ではないのね。軍人を相手にしてるのよ」などと言つた。始めは私には何故女がそんなことを言ふのか解らなかつたが後には段々解つて來た。

「大丈夫だよ」

私はかう言つて笑つた。

一緒に歸る時には、私達は停車場からプラットホームに出て、長い橋を渡つて、そして向ふ側の電車のゐる方へ行つた。明るい電車の車室！くつきりと浮き出すやうな女の白い顔、それは何んなに私に明るい快い印象を興へたであらうか。私はその刹那ほどはつきりと女をつかんだやうな氣がすることはなかつた。しかし私達は他人のやうに筋違

ひに腰をかけるのを例としてゐた。女は知つて居る人に逢ふことを非常に恐れてゐる。

他人のやうに——實際他人のやうにして、わざと知らん顔をして私達は腰をかけてゐた電車は入速力で駛る……駛る……電線から火花を散して駛る……その中で、明るい車室の中で、今少し前まで心と心とを合せた男女が知らん顔をして互ひに向ひ合つて腰を掛けてゐるといふことは、私には實に何とも言はれない不思議な感を起させるに十分であつた。「俺の女だ！」かういふ男性の得意な矜持が私の體を動搖させた。

垂替の場所に來ると、私も女も一緒に下りた。女は向ふ側の電車に行つた。誰も見てゐるものがゐないやうな時には、女は傍に寄つて來て、ソツと握手をして行つたりした。女の方の電車の遅い時には女の白い顔が此方の電車の中から見えてゐた。

「俺の女だ」

私はまた心に叫んだ。

月の明るい夜などもあつた。さういふ時には、私達は少し早く家を出て、田舎町をブラブラ歩いた。もう十三夜を過ぎた後なので、夜の空氣は寒く肌に沁みた。町でも大抵は戸をしめてゐた。コートに包れた女の影は濃く地上に落ちてゐた。

小さな祠見たやうなものがあつて、其處から太鼓の音が聞えて來た。私達は夫を目的に

歩いて行つた。そこには子供達や若い衆などが集つてゐた。掛い繪を帳つた燈籠などが一軒毎にかけてあつた。ドドンコ、ドドンコ——月は流るゝやうな光を四邊に漲らせた。

「もう歸りませう」
女はかう促した。

ある時は、またかういふことがあつた。電車に乗つて、筋違ひに腰をかけるとすぐ、紳士風の三十五六の男が不意に立つて此方に遣つて來た。

「何方へ？」

「まア——」私は女といふものの度胸のすぐれてゐるのを此時ほど感心したことはない。女は狼狽もせず、顔の色をもちかへず、全く自分一人であるやうな風をして、落附いた調子で、そのフロックコートの紳士と話した。

「大層遅く！」

「え、ちよつと用事が御座いまして……それに月が好いもんですから」かう言つて、「貴方は何方へ？」

「川向へまゐりまして」

「何か演説へでも……」

「相變らずごたごたしてゐます」

政治や教育の話、女は平氣でしてゐた。「私は黙つて隅の方に小さくなつてゐたが、何となくその紳士の顔が悪く見られた。

その次の週間に逢ふと、本當に困つた！あの位困つたことはありませんよ。貴方は笑つてゐるんですもの」かう言つて、「でも、解らなかつた。役者が上手ですから」笑ひながら私の顔を見た。

もう冬が來てゐる。ある寒い朝、私は私をその二階の床の中に見出した。昨夜、十時過、女を停車場まで送つて、そして歸つて來て寢た。いつもの快よい疲勞を味ひながら、ぐつすり寢込んだ。それを私は思ひ出してゐた。女の肖像は私を見てゐた。

窓を明けると、外はよく晴れてゐた。霜が屋根に白い。——私は急いで空氣の沈滞した女の匂ひの満ち渡つた私の樂園から遁れ出た。私は新しい空氣を吸ひたいと思つた。

早い朝の町、靜かであつた。黎明の光が微かに屋根を越して田圃の方からさして來てゐた。反古だの蜜柑の皮だの毛糸の屑だの落ちた上に、霜が白く置いてゐた。

湯屋の細い煙突からは、黄い青い煙が薄く颯つてゐた。

汽車の踏切りの處に、白い旗が出てゐると思ふと、客車に荷車を連結した北國行の一番

汽車が、凄じく地を揺かして通つて行つた。

私の心は不思議にもその朝の霜のやうに冴えてゐた。私はいろいろなことを考へながら歩いて行つた。かうした朝は、自分の一生に取つて紀念とするに足りるものがあるのではないか。かう思ふと、この町——今まで、一度か二度しか来なかつた町が、女の爲めにかういふ深い印象を残すやうになつたといふことが不思議にも意味深くもあるやうに思はれ出した。

私は踏切を越えて向ふに行つた。そこには、町の外郭といふやうな場末の町があつて、八百屋の上さんが、赤い襪をかけてせつせと働いてゐた。朝早く、菜を荷車に載せて市場に運んで行く男などもあつた。

路傍には小さな綺麗な川が流れてゐた。岸には洗つた菜の莖だの葉だのが流れ寄つてゐた。

暫く経つた後には、私はとある高臺の寺の石階を登つてゐた。淡竹の藪には朝日が當つて、雀が寒さうにチューチュー言つてゐた。下の菜畠の向うの家では、婆さんが手拭をかぶつて桔槔の水を汲んでゐた。

眼の前にはひろくとして野が展けた。疎らな榛の林を隔て、朝日が丸く赤く輦り出

した。遠く製紙場の煙突の煙が見えた。

不思議な人間と不思議な天然とを考へながら私は歩いて行つた。自分の今まで遣つてゐたことがすつかり眼の前に浮き出して来るやうに思はれる。かうした人間とかうした天然とが何の交渉もなしにかうして存在して居るといふことが不思議である。昨夜のことを考へると、——いや寧ろ私の樂園のことを考へると、戸外一步を隔ててかういふ天然があるといふことがいかにしても不思議である。……しかし不思議でも何でも仕方がない、何うにもならない。

私は此時不圖生存といふことを考へた。生存と快樂と……生存と快樂と何故かう一致しないだらうか。生温い、中プラインの快樂に妥協してゐられる人には、それは問題にはならないが、熱烈な不健全な快樂を受けなければ満足が出来ない人には、快樂の爲めに生存が何故不可能になるだらうか。何故二つのものは一致するやうに作られてないだらうか。……私は唯立つてゐた。唯じつとして寺の境内の垣の處に立つてゐた。本堂ではおつとめの朝の讀經が始まつた。

冷たい空氣が私の熱い心に沁み透るやうに呼吸された。

ある夜、女は遅くまで来なかつた。

それは雨の盛に降り頻る夜であつた。私は其日は三時過ぎに来てゐた。私は横しぶきに降頻る雨の中を蝙蝠傘に凌いで驅けるやうにして遣つて来た。外套を被てゐても、羽織の袖はしとどに濡れた。それを店で見てゐた娘は、わざわざ二階に上つて来て、「羽織を乾かして上げませうかと親切に言つて呉れた。

女が来ないので、いつもの料理を取つて貰つて、長火鉢の傍で、茶湯臺を出して、私は一人で食事をしてゐた。雨の夜の樂園、それも私には楽しかつた。停車場の灯が雨にチラチラしてゐるのを見てゐると、私は何だか遠い遠い旅にでも来てゐるやうな心持がして、思はず唄なぞが口から出た。——トタンの樋から落ちる雨水は、ザンザンと凄じい音を立てゝゐた。

十時頃になつても女は来なかつた。娘が上つて来て、「今日は入らしやらないでせうね、此雨では——」などと言つて、其處に坐つていろいろな話をし出した。

暫くしてから、

「戸を閉ましてよろしう御座いませうか」
かう母親は階下から聲をかけた。

今までにも来ないことはないではなかつた。電報を打つてよこしたこともあつた。豫め手紙でその都合を知らせて来ることもあつた。しかし斷りなしに来ないことは、これまで一度もない。……私は寒いさびしい心持を抱いて、じつとして座つてゐた。飲んだ酒もずつかり冷めて了つた。

私と女との間に繋がれてゐる秘密の糸、それを私はまた手繰り始めた。それは細い細い丁度電球の中にある細い線のやうなものであつた。「だつて……私だつて」かう女がいつも言つた。でなければ、黙つて私の顔を見てゐた。私はかうした樂園を容易にもう一つ他に想像することが出来た。女は何處かに、さうした樂園をつくつて、この雨の夜を楽しく送つてゐるかも知れなかつた。女の半生と女の肉體とは私にそれを肯定させるに十分であつた。色の白い、綺麗な、年の若い、才のある男が私の眼前を往來した。私に與へたやうな快樂を他の男に……。

……秘密の糸は震へた……

「或はもう自分に倦きて来たのかも知れない」こんな考が雨のザンザン降る音の中に無限に雜つて波を揚げてゐた。

「あの電車の中て見た紳士……いや、それではないだらうが、交際家のかの女は、あゝ

いふ男が澤山にゐるに相違ない……。これまでの話を女が決してして聞かせないのもその爲めだ。……女の本性を……さうだ、女の本性をすつかり看破つてやらなければならぬ」

私は益々深い黒い淵に落ちて行つた。

……ふと、下で「只今、只今、あけます」といふ聲が聞えた。私は耳を欬てた。しかし雨の烈しく降る音に遮られて、暫しは何も聞えなかつた。やがて「まアまア、濡れましたね、奥さん！」といふ母親の聲が聞えた。私は躍り上つた。

やがて、階梯を靜かに上つてゐる女の足音が聞えた。私はそれを聞きながら、つとめて平氣を繕つてじつとして座つてゐた。襖がすうと明いて、女の白い顔が浮き出すやうに其處に現はれた。

「お、寒い、すこし當らせて頂戴」

コートの上まで、濡れたまゝで、火鉢の處に来て、手と顔を其處に出した。暖かい、むつとした、蒸すやうな氣が樂園のヒロインの來ると共に一間に満ち渡つた。

「濡れたね」

「だつてひどい雨ですもの」かう言つて、コートをぬぐと、下から派手な長襦袢がチラチ

ラと見えた。

「寢衣があつたわれえ……濡れたから、着改へるわ。貴方取つて頂戴！」

その命令に男は拒む能力がなかつた。男は後の唐紙を明けて、押入れの中から大島の着古した寢衣を出して女に渡した。

長押にかけた濡れた着物の紅い裏地が、電燈の灯に繪か何んぞのやうに見えてゐた。女は長襦袢の上に寢衣を着て、黒襦子の帯をして火鉢の傍に座つた。

「來ないかと思つたでせう……今日は泊つて行くのよ」

私の耳にはその「泊つて行くのよ」の一語は際立つて強く響いた。私は私の體の動搖するのを感じた。

「好いのかえ？」

「だつて、歸れやしないわ。此雨ぢや——」

その言葉の中には、「もう構はないわ、何うなつても」といふやうな調子があつた。一間は俄かに暖かな春のやうな氣分で満されて來た。女は臆つて置いたウイスキーの罎を取り出した。

ウイスキーの罎と、ペーパーと、女の長襦袢と、雨と、——明るい電燈と……私達は話した。

「今日は何うしても聞かしてお呉れ」

「聞かすやうなことを持つてやしませんよ。」

「隠したって駄目だ」

「だって、ないんですもの」女は體を長く出して、巻煙草を吸った。

「あの女の肖像の持主は？」

「……」

「あなたの家に入出入するあの若い役者のやうな男は？」

「……」

「あの髯の生えた男は？」

「……」

女は何を言つても黙つて笑つてゐた。

私も終には疲れて黙つて了つた。「そんなこと、何うだつて好いぢやありませんか。唯、かうしてゐさへすりや好いぢやありませんか」かうある時女が言つたことを私は思ひ出し

てゐた。「しかし、それは出来ることだらうか。唯かうしてそれで満足してゐられるだらうか。力と力ががうまく平均して、即く時にも過不及なく、離れる時にも過不及なく、ずつと靜かに寄つて来て、そしてずつと靜かに離れて行くことが出来るものだらうか……？……？ 出来るものだらう。出来なくつてはならないものだらう。いろいろな羈絆や、いろいろな情實や、いろいろな過去の追憶や、さういふものを離れて了へば、唯、それだけで満足することが出来るものだらう。」——此時私は女の強い力を總身に感じた。同時に私の心は重苦しい壓迫を受けた。

女は立つて瓦斯の線を引き出した。と、室の中は柔かい靜かな光線になつて行つた。で、その靜かな光線の中で、女は長い間長い西洋の小説本を讀んでゐた。それは面白い一度讀み始めては到底最後の頁まで讀まなければ置けないといふやうな本だと女は話した。

私は眠つたり覺めたりしてゐた。夜中にも、女は依然として——愈々深くその興味に捉へられたといふやうにして、その本に讀耽つてゐた。私は寢惚けた眼で、それを上から覗いて見た。「また讀んでゐるのかえ？」かう言つてまた私は眠つた。

私は其夜は、尠くとも四度までは、さうやつて女の讀んでゐる本を上からのぞいた。女の眼はいつもパツチリと大きく明いてゐた。何かかう他界の力にでも引き摺られるやうな

興昂した顔色をしてゐた。「あゝ——」などと長太息をついてゐた。

夜明近くなつてから、女は寝た。其時、女は立つてもう一度瓦斯の線を引いたのを私は知つてゐた。で、私が翌朝眼を覺した時には女はぐつすり寝てゐた。繪に書いた女のやうな寐顔をこつちに見せて、何も知らずに熟睡してゐた。雨戸の隙間からは、朝の光がさして、通を行く人の足音が高く聞えてゐた。

昨夜、讀耽つた厚い本は、開いたまゝ、女の枕元に投げ出してあつた。私はそつと起きて、雨戸を一枚明けて、新しい空気を吸ひに下に下りて行つた。雨は拭つたやうに晴れた美しい朝だつた。

「私の樂園に比べたなら、まア何といふさびしい心細い世界だらう。塵埃、泥濘の中を人は蒼い顔をして歩いてゐる。車を曳くもの朝早くから工場に通つて煤烟の中に一日を送るもの、出勤時間に後れてはと急いで停留場へかけつけるもの、人間は灰色の世界に生きて、灰色の空気を吸つて、瘦せて、汚ない衣を着て、そして働いて生きてゐる。何といふ惨な世界だらう……。しかし私の樂園には、さうした空気は入つて來ない。其處には、風が吹き、雨が降り、時には黒い雲が襲ひかゝることがあつても、それは灰色した世界の雨や風

や黒い雲ではない。皆な強烈な色を持つたものばかりだ……。苦悶、懊惱、さういふものでも、矢張その灰色の世界のものとは違つてゐる。紅い火の舌のやうな懊惱だ。——」
ある日の私の日記には、かういふ文句が書かれてあつた。それは三月十五日のところである。「赤い花、赤い血、赤い心」などいふ字が一面に書いてあつた。

「私の二階！ 私の樂園！ それももう……。ある日のところには唯かゝ會いてあつた。秘密の細い糸が切れたと思つては、また續いた。

週間ごとに、女に對する心持が絶えず變つてゐた。女に對する噂！ それが何うかすると、新聞などに出ることがある。虚偽であらうが、それが私の心を種々に動かした。

私は私の心の細かい研究者であつた。一月以前と十日以前とそれと今とをよく較べて見た。私の心は前へ進んだり後へ退いたりしてゐた。それでも、私の心はいつの間にか女の方に偏つて行つてゐた。氣が附いて見ると、女の態度が此頃冷淡になつて行つたやうに思はれた。寧ろさういふ風に冷淡に見え出してゐたことが私には苦痛であつた。時には女の方から偏つて來て、そして自分が離れて行つたりした。「よう御座んす。貴方ばかりが被要求者じゃない。好う御座んす」かういふ表情を顔に表して女が歸つて行く頃は、まだ心丈

夫なところがあつたが、今では、もうさうした表情を示すやうなこともなくなつて了つた。白い冷めたい大理石のやうな顔だ。

「私について來られるなら來て御覽なさい！ 貴方にはとてもそれは出來ない」此頃ではその白い顔は確かにさう言つてゐた。

不思議にも私の心はその冷い心に向つて震へた。それは冷めたいが爲めに震へたといふやうな震へ方であつた。女のかげにゐる男達に對して私の心が熱したのだ。

疲れた心だ。——氣が附くと、私はその電車に乗つてゐる。

電車は全速力で駛つてゐる。

花はもう散つて了つた。緑葉が到る處の林を包んで、麥の緑は長くなつてゐた。折れ曲つた細い川が銀線のやうに光つて見える。

郊外の家の縁側には夜着だの着物だのが干してある。

日がキラキラする。それについて心がキラキラする。——二階の卓の上には、此前の週間に、ダリアを持つて行つて置いたが、娘は水をやつて呉れたらうか。主人のない室の中に暗く萎れ果てゝはぬないだらうか。「だつて、私、知らなかつたんですもの」かう言つて

娘の笑つてゐる顔が見える。娘が若い士官を相手に面白さうに笑つてゐる聲が聞える。

……氣が附くと、娘と自分との間に段々醸されて來た空氣を私は頭に浮べてゐた。同じ顔を毎日十年見てゐても何の反應を起さないやうなものもあれば、見てゐる中に段々一種の氣分を醸して行くやうなものもある。そしてある機會が來て、その醸された氣分にはつと火が點く。

私の前に丸髷の女がゐる。それが隣の男と話してゐる。

「さやうで御座います、……もうすぐ暑くなります」

「御宅では變りはありませんか」

「難有う御座います。お蔭様で……」

丸髷の女の顔に笑を帯びた一種の表情がある。男のあたらしい夏帽には、涼しい風が絶えず吹いてゐる。……

「だつて、何うしたつて、貴方の言ふやうには出來ないんですもの」

女がある時かう言つたことがあつた。で、「ぢや、いつまでもかうしてゐるんですか」私はすぐ反問しかけて止した。其處が私達の越えることの出來ない最後の一段だ。

電車は快よく駛つた。

毛氈を敷いたやうな緑の糾草地が眼の前を掠めて行つた。
それは林の陰になつてゐた。日影が紅葉を飾つてチラチラとその滑かな芝生の上に落ちてゐた。其處に若い男女がゐた。女の白いリボン、男の麥稈帽——電車はその傍を掠めて滑かに行つた。

女の來なかつたことが三週間續いた。女が旅にも何處にも行つてゐないことは、新聞で知れた。女の家には交際社會の男だの女だのが行つたり來たりしてゐる。その交際室——大きな鏡のある、立派な毛氈を敷詰めた、蘇鐵や松の硝子窓越しに見えるその室、それを私は暗い私の樂園で想像してゐた。

大きな鏡に映つた女の淫蕩の顔と體とを私は想像した。その鏡はその時屹度女と並んだ男の顔を映したに相違なかつた。

ハイカラに分けた髪、短かく刈つた口鬚、女は派手な着物を着て、その男と手を組合せて、長い廊下をその大きな鏡の方へと歩いて行つた。鏡に映つた影は、鏡に近づくにつれて、段々大きくなつて行つた。

女の顔はもう少し前に飲んだリキウ酒に酔つて、派手な美しい薄紅色に染つてゐた。少

しく酔つた時にのみ見ることの出来る柔かな自由な線は、女を五つも六つも年より若く見せるばかりではなかつた。其處からはあらゆる淫らな氣分が漲るやうに出てゐた。——私はその氣分の快樂に酔ふために、寐る前にいつも女に酒を勧めたことを思ひ出した。

私は女から得たあらゆる快樂を他の男に移して想像した。幸福な男に、女のあの熱い心を、何處かで、何處かの樂園で得てゐる男に——。

私の受けた快樂は、皆な私に謀叛を企てた。それが一つ一つ嫉妬に燃えた私の心に反響して行つた。最初の快樂、それは何んなだつたらう。背の高い白い姿が影のやうに、静かな、薄暗い、室の空氣の中に入つてゐた時は、それは何んなだつたらう。頭はガンとして心臓の鼓動のみが高く聞えたのを私は覚えてゐる。

初めて女がその意を示した時には、
「本當？」

かう言つて、私に生々した色を呈して、そして傍に寄つてゐた。私は喜悅と感謝と成功とで胸が一杯になつて、何ツて言つて好かわからなかつた。私は唯堅く女の手を握つた。全速力である世界からある世界へと飛んで入つて行つたその大きな快樂——それが今は皆な私の胸にはれ反つて戻つて來た。

私は女の熱情の「一回は一回毎に冷めてつめたくなつて行くのを知つてゐた。ある時こんな會話をした。

「何うしてかうてせう？」

「何が——？」

「私よ。ぢき氣が沈んで了つて仕方がないんですもの」

「面白いことがないんでせう」

「それも、さうかも知れない。私の性分でせうけど、私はぢき倦きるのね。何でも初めは面白いけど、ぢき灰色になつて仕ふのね」

「始終、面白くなくてはいけないんでせう？ 平凡な境には生きてゐられないツていふ風なんせう？」

「さうれえ」

「それに、物を知つて了ふと面白くなるツていふ處があるね。」

「さうね」

女が詰らなさうな顔をしてゐる時ほど氣分のツメツメする時はなかつた。何うかすると卓に凭りかゝつて、いかにも詰らなさうに女は物を考へてゐた。

「餘りつまらないから、何處か變つたところに私達の二階を移しませうか」

ある時、女はかう私に言つた。

「だつて、こゝで好いぢやないか。こゝより好い處などがちよつと探したツてありやしないと思ふがね」

「さうてせうか」

私の顔を見て、「だつて、この室にも厭きたやうな氣がするもの。停車場から下りて來ると、屹度あの色の白い車掌がゐて、顔の大きい車屋がゐて、いつも莞爾と愛嬌のある母さんと娘とがゐて、そして、この暗い二階に貴方が蒼い顔をして待つてるんぢやないの？」

「蒼い顔かえ？ 僕は——」

「蒼い、元氣のない顔をしてることが多いよ、此頃は——。何うして、あの初のやうな氣分になれないんでせう。私もさうだつたけれど、貴方も元氣でしたれ。本當に面白かつたんですもの」

「それはさうだれ、あの時分の方が元氣で面白かつた」

「さうてせう、だから、私達の二階を變へる方が好いと思ふんだけど……」

「さうしたら、面白くなるだらうか」

私はかう言つて女の顔を見た。

「それは分らないけれど、もつと明るい快活な處に行つたら、また屹度面白くなりますよ。」
「さうかしら——本當にさうなら、さうしても好い」かう言つた私は、娘の無邪氣な顔を思ひ出してゐた。

しかしその話はそれ切りであつた。女は強いてさうしやうとも言はなかつた。忘れたやうになつてゐた。

三度目の日には、「ケウユカレヌ」といふ電報を打つてよこした。娘がそれを持つて來たが覗き込んで、「何うなすつたんでせうれ」と言つた。陰鬱な雨が毎日毎日續いて降つてゐるといふやうな時節であつた。窓を明けると、人が高い足駄を穿いて、番傘などをさして通を歩いてゐた。

娘と私とはその時何 話した。

「軍人なんかきらひ！」

かう言つて笑つた娘の顔を、私は後まで起憶してゐた。

私は雨を衝いて歸る氣にもなれなかつた。で、私は一夜を其處に送ることにした。外では雨が容易に止まないと見えて、雨だれの繩をつたふ音が絶えず微かに聞えてゐた。

電燈がほつちり點いて、それが西洋の草花の鉢植の置いてある空しい卓の上をさびしく照した。前の鏡には私のさびしさうに座つてゐる姿が電燈の白い笠と一緒になつて映つてゐた。私は自分で自分を憐むやうな心持で、凝とその鏡の中の私の姿を見てゐた。

簞笥の上には、女の鏡臺が載つてゐて、そこに白粉の小さな罐が並んで置いてあつた。私は靜かに思ひ廻してゐた。不思議にも、其夜は私の心は落ち附いてゐた。いつものやうな懊惱からは全く自由にされてゐた。

私は私達のこの二階に就いて、いろいろ思ひめぐらしてゐた。熱い人間の心が冷めたい自然に歸つて行く状態がことに歴々と思ひ淨べられた、私達に初めて發見されたこの二階は冷たい靜かな空氣から何んなに俄かに暖かい賑やかな空氣に變つて行つたらう？ 貧しい單調な灰色の壁は、忽ちにして、いろいろな色彩に富んだ額やら寫真やら埋められた佗しい暗い天井は明るい電燈や瓦斯で晝のやうに照され、古びた長押は、派手な長襦袢や燃え立つやうな紅い裏地などで繪のやうに彩られた。卓の上には、何んな時でも草花を絶やしたことはなかつた。そして私達はその明るい灯の中、小さい杯さかづきにいろいろな色をした酒をついで飲んだ。

ほんのりと酒に酔つた女の薄紅色の顔は、其處にも此處にも見えた。

此の間では、女は何物をも隠さなかつた。總てを男に示した。私達は出来るだけの快樂を其處で盡した。何たる飽満だつたらう？ 何たる贅澤だつたらう？ 何たる豊富な色彩だつたらう？——然し今はもう過去だ。私はそれを追憶する身になつてゐるのだ。女の言葉、女の表情、それが總て静かにしめやかに降る雨の音の中に細かに展げられてゐた。

熱い心が段々に冷めて行く状態は、それは丁度妬みの神があつて微かに竊かに隙間を覗つてゐるやうなものであつた。その神は、二人が熱心に語り合つてゐる間に、いつともなくその力を働かして行つた。私はその力のひそかに通つて行つた跡を眺めた。

塵埃に埋れて花瓣の白くなつてゐる草花の鉢を私は見てゐた。「ケウユカレヌ」といふ電報が卓の下に落ちて、はつきりと灯に照されてゐた。

朝、私は裏の窓を明けた。煙が細い雨の中に這うやうに低く靡いてゐた。向ふには、物置があつて、薪だの、炭俵だの置かれてあるのが半分見えてゐた。

井戸側には釣瓶の竿が見えてゐた。

ふと、娘の姿が現はれた。白い手拭を姐さんかぶりにして赤い襷を十文字にかけてゐた。物置の中にその姿を半分入れて、炭か何か出してゐたが、やがてそれがすむと、そこから雨を衝いて家に駈けて入つた。

暫くしてその姿はまた井戸端に現はれた。釣瓶の竹を持ち上げる白い腕が梭のやうに行つたり來たりした。

私は聲をかけて見やうかと思つた。しかし私はこの朝の忘れられない感じを十分に味わいたいと思つて止した。「もう、あの娘は僕のものだ！」かう思つて私は得意な微笑を洩した。

娘は釣瓶から水を手桶に明けた。二つの手桶はやがて一杯になつた。

「何んなことを考へてゐるだらう！ 昨夜のことを考へてゐるだらうか」かう思つた時、娘は何氣なしに此方を見上げた。

「まア——」

娘はかう言つて笑つた。

娘は暫らく立つてゐたが、内から母親に呼ばれて、そこそこに手桶を下げて入つて行つ

た、私はもう一度娘の姿の其處に現れるのを期待した。長い間、窓の處に立つてゐた。雨は細く降つてゐた。

娘の姿は容易に出て來なかつた。

「處女ではなかつた！」かう思つて私は微笑した。思ひもかけないことが突然地の中から湧いて出たやうな昨夜の事件を私は繰返して考へずには居られなかつた。「あなた、お邪魔しても好いの？」かういふ娘の聲がした。微かな小さな聲だつた。「ようござんすとも」私はかう答へた。娘はこれまでもさういふ風にしてよく遊びに來た。母親もそれを許してゐた。

「其時、何を話したらう？」私はかう思つて昨夜の光景を眼の前に浮べて見た。さうだ、女優の話だつた。女優になりたい、どうかして女優になりたい、かう娘は言つてゐた。「女優になつて、何うするんだ？」

私が訊くと、

「だつて、私など、こんなにしてゐては、いつまで待つ……うだつがあがりませんもの。女優になりたいわ……女優になりたいわ」

「それより士官の細君の方が宜いよ」

「イヤアよ、軍人なんか甘へるやうに言つて、「この二階に、前に若い士官の夫婦がゐましたけれど、イヤアよ、あんな生活……惨めなもんよ、軍人の生活なんて」

「女優だつて、中に入つて見れや、そんなに面白いもんぢやないよ」

「面白くなくても好いの、女優なら。女優にして下さいよ」

「そんなになりたいかな」

「なりたいわ。何でも勝手なことが出來ますもの」

こんなことを言つてゐた。私が女優を知つてゐるので、それで頼みに來たのであつた。「それから何を話した？」私はかう自分で自分に訊いて見た。私はまた微笑した。その時私はふと私と娘との間に展開されつゝあつた心に誘はれて行つた。娘も笑つて此方を見てゐた。私のついてやつたウイスキーの小さな盃を、その時娘は嘗めるやうにして飲んでゐた。

娘は椅子に腰をかけてゐた。

女のいつも腰をかける椅子だ。私は……私は……私は……

今朝見ると、椅子が倒れかゝつてゐた。

「處女ぢやない、處女ぢやない」私はもう一度言つて微笑した。

金の指環——波に千鳥の彫刻のある金の指環を、それから三日目に娘は左の手の薬指に
はめてゐた。
緑の寶石の入つた指環をもはめた。

その次の週間に、女は遣つて来た。

女は細かな刺繍をした夏襟をして、透き通るやうな着物を着てゐた。「用があつたもんだから」などとそれでも申譯らしい口の利き方をした。

「何うしてたの、矢張、来てたの？」

「あゝ来てた」

男は得意さうな顔をして言つた。

私は娘が店の一隅に小さくなつてゐるのを見た。
其夜は女は早く歸つて行つた。

呼んでも娘は容易に二階に上つて来なかつた。それをつれて来るのは一方ならぬ骨折であつた。

「私、もう、怖い！」

「何が——」

「あの人が」

「そんなことがあるもんか。怖くなんかありやしないよ、平氣である方が好いよ」

「でも、あの怖いわ」私の顔を見て、「貴方も怖い……」

「何うして？」

「だつて私、イヤな氣がした。」

私は娘の心を讀むことが出来た。

「好いよ、そんなに心配しないで……もう段々来なくなるから……。それに、知らん顔をしてゐれば好いんだよ」

「だつて……」

娘はすぐ下りて行かうとした。

種々な物が娘には出来た。蝙蝠傘だの、エールだの、純金の帶留めだの、新しい一重の夏のコートだの……。此頃娘が女優か何ぞのやうな綺麗な扮装をして、町の方へ出て行くのを、近所の上さん達は何の彼のと言つて噂をした。

娘の買つて来た草花の鉢が二階の卓の上に置かれてあつた。それを女が見てゐたりして、「何うしたんだらう。あの娘は？」

かう言つて、女は娘の後姿を見送りながら、「ちよいと来ない内にあゝも變るものかええ。本當に、若い娘は一日と言はれないえ……」

かう言つて、不思議さうに、女から姿をかくさう——隠さうとしてゐる娘の方を見てゐた。

「それに、見違へるやうに奇麗になつた」こんなことを言つてゐた。私の顔をじつと見てゐたりした。

「何か出来たんぢやないか？」

「さうだらう屹度、……中佐とか大佐とか言つたよ」
「さう？ 道理で……」

かう女が言つた。私は微笑した。

私の二階の空氣は不思議な色彩を著けて来た。今まで單純な心持と單純な心持と單純な調子と單純な色彩とで成立つてゐた二階の空氣は、此頃影だのを帯びて来た。光線か絶え

ず動揺した。

堪へ難い懊惱を女に渡して了つたやうな氣分ではゐた。女が三週間来まいが、一ヶ月來まいが、恨みがましい言葉はついぞ私の口から出なかつた。女が望んでゐる熱い心持には何うしてもなれなかつた。手答へがないので、女が手持無沙汰である様子が私にはよく解つた。

私は女を送つていつものやうに停車場まで行つた。

「左様なら」元氣な聲で私は別れを告げた。

今まで私はよく男の話をした。それを近頃はおくびにも出さなくなつた。女が何んな男と一緒に歩かうが、何んな男と一緒に顔を鏡に映さうが、それを氣に留めやうとはしなくなつた。

ある日、こんな話をした。

「貴方も此頃變ですれ」

「何うして？」

「丸で前のやうぢやない……」

「何う？」

「元氣が好いんですもの」考へて、「もう、私なぞ何うても好いのね」

「そんなことはないよ」

「さうかしら」

私は笑つてゐた。女はその時椅子に腰をかけてゐた。その朝、横に倒れてゐた同じ椅子に

……。

胡 瓜

「おい、茶でも飲まないか。」

かう言つて、奥の書齋で今日の戦術の宿題を考へて居る軍人の弟に主人の兄は聲をかけた。この弟は野戦隊附の大尉で、半年ほど前から戸山學校に来て居た。夜はもう九時を過ぎて居た。

「ウム。」三分の洋燈を前に、大きい體を猫背にして、せつせと鉛筆を運ばせながらかう答へた。庭の梧桐が硝子戸を透して、灯影に青く搖いた。

簷は昨夜軍人が買つて來た鈴蟲が好い聲を立て、居た。

「これは、よく鳴くなア。」

兄は簷に吊された小さい虫籠をのぞくやうにして言つた。

「僕の買つて來るものは皆なさうしたもんさ——アハ、ハ、」と弟は大きく笑つたが、しかし鉛筆を手から放さなかつた。

「おい、本當に茶でも飲まう。氣が盡きて了つた。」

「ウム。」鉛筆を持った儘、兩手を伸して、大きな欠をして、始めて書齋の入口の處へ立

つて居る兄の方を見た。さしてさも勞れたやうに、仰向けに後にドツと體を横へた。煙草盆には蚊遣線香が二本、細い紫の烟を立て、居た。

兄は長い縁側を通つて、蚊帳の一杯に吊つてある居間に來た。妻が幼兒に添乳をしながら、いきたなく眠つて了つたのが茶の間から映る灯影でそれと見えた。今少し前まで騒いで居た子供等も皆な眠つて了つた。

「おい、又、眠ちやつたのか。起きろ、起きろ！」

かう呼起して置いて、蚊帳の狭い間を通つて、主人は茶の間に來た。其處には誰も居なかつた。室の中央にホヤの尖の少し煤けて黒くなつた五分の洋燈がボンヤリと點いて居て、子供等の今まで騒いだ箱だの玩具だのが其處等一面に散らばつて居た。沸え立つた鐵瓶からは白い湯氣が徒らに立つてゐた。

婢と子守と、仕舞湯に入つて居る氣勢が勝手障子を隔てゝそれと聞えた。

長火鉢の前に坐つて、主人は先づ鐵瓶に水を注した。同時に、向ふからドシン／＼と重い足音が聞えて來て、大きい體をした軍人が銅色をした莞爾した其顔を其處に出した。

「おい、おい、起きないか。」

主人はまたかう細君を呼起した。

細君はやがて眠むさうな眼をして、蚊帳を捲つて出て來た、久留米緋に派手な色の見える帯上げをして居た。

「茶でも飲ませないか。」

長火鉢の前に坐つても、まだ細君は眠むさうな眼をして居た。鐵瓶に觸つて見た手を憶て、引込ませて、

「おう熱い！」

「馬鹿！ ねほけて居やがる。」

かう主人は笑つた。

「宅の奴もよく寝るよ。子供を寝かすつて言つては、ぐうぐう寝ちやうんだから仕末にいけない。子供と一緒に寝るのは、好い心地なんだねえ、嫂さん。」

軍人もかう言つて笑つた。

「母親が寝る位にならなれりや、子供も寝られないのかも知れない。」

「はア、さうかなア。」軍人は感心したやうに言つて、「さうかえ、嫂さん！」

「何うですかねえ。」

細君はかう言つて笑つた。

茶を飲みながら、

「何か食ふものはないかなア……何だか腹が減つた。」

主人がかう言つて細君の方を見ると、

「生憎、何にも……」

「カステラは？」

「子供が食べて了ひました。」

「最中は？」

「さういつまでもあるもんですか。」

「本當に何もないのか？」

「ええ。」

と細君は笑つて居る。

「ぢや、何か買つて来い。」丁度、湯から上つて着物を着て居る婢に向つて、「おい、一寸通

りまで行つて来て呉れ。……夏蜜柑？」夏蜜柑も旨くない。覆盆子はないかなア。」

「覆盆子は何うですか……此邊の八百屋には、そんな氣の利いたものはありませんかられ

え。」着物を着て白粉を眼に立つほどつけて出て来た婢に、「それぢや、お前、宅の八百屋に行つて覆盆子があつたら取つて来てお呉れ。なかつたら、夏蜜柑を……。」

「夏蜜柑はおれは御免だ。覆盆子がなかつたら、菓子を買つて来い。」

「おい、使つかひに行くなら鳥渡待ちよつとまつて呉れ。頼むものがある。」かういつて、軍人はドシ／＼立

つて書齋に行つたが、やがて戻つて来て、二錢銅貨を其處に投り出して「胡瓜を一本買つて来てくれ。」

「胡瓜を一本？」

細君が不思議な顔をすると、

「何に、鈴虫にやらうつて言ふんだよ。」

主人が傍から言つた。

「なら、好う御座んすよ。宅の八百屋から取つて来るから。」細君は二錢銅貨を押戻した。

「いよゝ、これで買つて来て呉れ。」

軍人はまた押戻した。

婢は子守と一緒に軽い胸下駄の音を立て、出て行つた。

から茶をかぶく飲みながら三人は話し合つた。

昔の話が出るかと思ふと、女の話が出た。戦争の話が出るかと思ふと、田舎の女房のお惚が出た笑聲が暫しこの一問を賑かにした。

軍人は常に大きな聲で話した。

「何うも、軍人の聲の大きいのは、野天で號令をかけるからだれえ。馬夫の聲の大きいのも同じことだ。」主人がこんなことを言ふと、

「口が悪いなア。兄さんは……。」

かう言つて笑つた。

弟は毎日教はる戦術の話を得意になつて話して聞かせた。海軍の參謀が來て講話したといふ日本海戦の話や、一月前に沼津近傍に行つて實地研究をやつた話や、習志野の野營で菓の上に寐る時の賑かなことや、さうした話を熱心になつて飽かず話した。兄はそれをお役目のやうにフン／＼と言つて聞いた。弟もまた兄の文學上の話をうはの空でフン／＼聞いた。二人ともその二人の得意な話が解らなかつた。

其夜も軍人は書齋から五萬分の地圖を持つて來て、一面に其處にひろげて、宿題に出された戦術の話をした。此處に北軍の本隊が集中を終つた。南軍は某地點に上陸して、此方

面に向つて前進する。倉庫は何處と何處とに置かれてあるといふ状況は斥候の報告で解つてゐる。然るに、此處に南軍の一支隊があつて、某地點に上陸して北軍の後方を脅威する任務を有つて居るとする。さうしたら、其隊は何處に行くか、何處に出て行くのが一番有効であるか。「さういふ宿題だが、路が二あつて何方にも利害があるんだ。」かう言つて地圖を合せて見て、「構はん、構はん、さう出て言つてやれ。」話をして居るのだから、研究をして居るのだから解らぬやうなことを言つて聞かせた。

二十分経つても、婢共は歸つて來なかつた。町の通はそんなに遠くはなかつた。毎朝御用聞に來る八百屋は橋を渡るとすぐであつた。

「何うしたんだらう？」

一番退屈な細君が先言つた。

十分は又経過した。

「本當にどうしたんだらう。」

主人もそろ／＼欠をし出した。

「本當に、氣が利かないかられえ。屹度、覆盆子がないので、何處か先まで行つたんだよ。」女の足は遅いからと辨護して居た軍人も、やがて得意の戦術の話をやめて、大きい欠を

するやうになつた。人々は退屈なので、ついがぶくと茶を飲んだ。茶請の來ない中に、

鐵瓶は空になり、茶は出流れて了つた。

わざわざ茶請を買ひに遣つた一座の興もさめた。

「本當に何うしたんだらう？」
道を通る人の足音を聞いて、「今度こそさうだ。」などと言ひ合つた。しかし門はあかなかつた。

「本當に遅いれえ。」

忍耐な軍人も終にはかう言つて、柱にかゝつた時計とけいを見た。

「田舎にゐる頃、狐に魅されたことがあるツて言ふから、またそんな目にでも逢つてゐるんぢやないかしら？」

餘り遅いので、細君はこんなことを言ひ出した。

「チョツ、馬鹿にしてやがる。こんなに遅いなら、買ひにやるんぢやなかつた。」かう言つた主人には、もう茶請などを食はうといふ興も餘裕もなかつた。

「もう、寐やう。」と言つて見た。しかし腹は空いて居た。

三人は腹立しさうな眞面目な顔をして鼻を突合せて居た。もう茶を飲むものもなかつた。

話をするものもなかつた。時計のセコンドの音ばかりがしんとした一間に音高く聞えた。

今度こそと思つた足音も通り過ぎて了つた。

「もう、寐る。」

主人は立上つた。

軍人も書齋に行つた。鈴蟲は野い聲を立てて居た。

やがて歸つて來た婢は汗をビツシヨリかいて、顔を赤くして居た。三寸ばかりの小さいしなびた胡瓜をごろりと一箇其處に出した。

まだ出たばかりの走りの胡瓜は、この場末の八百屋などにはなかつた。婢は二錢銅貨を油汗になるほど固く掌に握りながら、町の通を、それからそれへと聞いて歩いた。家待つて居るといふことも知らぬではなかつた。しかし胡瓜を買はずに歸るといふ氣にもなれなかつた。婢はとうとう停車場の先まで行つて、漸くある八百屋に一本あつたのを探し出して買った。

ビツシヨリ汗になるほど、急いで歸つて來た。

「馬鹿な奴だ！」

かう主人かゝは叱られた。

「本當にお前氣が利かないれえ！」

細君ちほらもかう言はれた。

「高い胡瓜まろだなア、これで二錢！」軍人はかう言つた。

胡瓜は暫く其處に放り出されたまゝになつて居た。

婢は膨れざるを得なかつた。子守はこそくと寐衣と着改へて、次の間に寐に行つた。

主人はそれでも餅菓子もちこの竹皮包を引たくるやうに取つて、やゝ固くなつた大福をむしやくと拙さうに食つた。三人とも元のやうな氣分にはなれなかつた。

つかえた大福を咽喉に通す爲めといふやうに、傍にひいたまゝ冷めたくなつてゐる湯呑の茶をグツと主人は飲み干した。細君が餅菓子もちこを二箇取つて遣ると、婢はそれでも膨れた顔をして手を出した。

「もう寐やう、詰らん、詰らん！」

主人は立つて行つた。

軍人が胡瓜を持つて續いて立つて行つた後で、細君は婢まに向つて一人ぶつくと小言を言ひながら、夏蜜柑の皮を剥いた。

鈴蟲は頻りに鳴いて居た。

翌朝、楊枝を使ひながら、主人が縁側に行つて見ると、井戸端に顔を洗ひに行つて戻つて来た弟は、書齋の入口に立留つて、簷の蟲籠を下して、頻りにそれを弄つて居たが、

「や。」

と眼を丸くして、「や、鈴蟲が居ない。」

主人の方を見て、

「誰かこれを弄りやしまいな。」

「何うした、鈴蟲が居ない？」主人も其傍に寄つて来た。「誰れが弄るものがあるものか。」弟の手から籠を取つて見て、「此處から遁げたんだ、ほら、此處がかうなつてゐる。」かう言つて、細いしごの一本曲ぼんつて居るところを指した。

「さうかな、此處から遁げたのかな。」軍人は徒らにひつくり返して見て、更に其處等をきよろくとさがした。鈴蟲は何處にも居なかつた。

昨夜買つて来た二錢の胡瓜は其日の夕方までそこらにころところがつて居た。

劇場で

「今、めづらしい人に逢つた……」

幕間に厠に行つた細君は、莞爾笑ひながら、かう言つて戻つて來た。
「誰に？」

「それや、めづらしい人……」細君はわざと落附いたやうに寧ろ相手の好奇心を一層強く引張つてやらうとするやうに、「誰に逢ふか知れないものね」
「誰だえ？」

「今、便所に行つたら、人が一杯待つてるんでせう。おとなしくしてゐてはいつまでかゝるか知れないと思つたから、づうづうしく先へ行つて、やつと小用だけ足して出やうとすると、そこにお園さんが立つてるぢやありませんか——」
「お園が？」

亭主の顔には驚愕と好奇心との表情が歴と現はれて來た。

「來てるのかい？」

「え、」細君は笑つて點頭いて見せて、「此方から聲もかけもしないのに、奥さん！ つて、傍に遣つて來て、「まアおめづらしい」つて、それはなつかしうなんでしょう。何時も若いのれえ」

「何處に來てるんだえ？」

「うづらに居るつて言つたけれど……」かう言つて細君は四邊を見廻した。けれど、何處にもそれらしい姿は見えなかつた。

「お客と來てるんだらう？」

「い、え、さうぢやなかつたやうでしたよ。義理の見物に來てるらしい……。何とか言ふ姐さんとそれから二三人で來たつて言つてみましたよ。……今度の幕間には、行つて御覽なさい」

かう言つて細君は笑つた。もう幕は明いてゐた。奇麗な菊の花の庭が一面に其處に展げられてあつた。白鬚のお爺さんと下僕の男とが何か頻りに話してゐた。此方の方からは、奇麗な女が二三人遣つて來ました。

「あれが橋屋ね」

などと細君は小聲で亭主の方を向いて言つた。しかし、その心は舞臺の上よりも、厠で逢つたその女の方に奪はれてゐた。……あの女が始めて家に來た時……始めは流石に極りがわるさうにしてゐたが、段々話がはづんで來て、亭主をほつたらかして、一緒に長唄を弾いたり何かして一日暢氣に遊んだことがあつた……それから交情がよくなつて、一緒によく芝居へなぞ遣つて來た……此座へも來たことは二三度はあつた……その向ふの座敷の處に亭主と三人で來てゐたことなどがあつた……でも辛いこともあつた……腹が立つて仕方がない時などもあつた……舞臺には、若い鬚に結つた凜々しい男が出て來てゐた。冴えた聲で臺辭が流るゝやうに其口から出た。白鬚のお爺さんは、容態ぶつた風をして、床几に腰をかけて、其方を見てゐた。

二

亭主はオペラグラスを取つて、それを眼に當て、舞臺の方を見てゐた。しかしそれは長い間ではなかつた。その雙眼鏡はやがて棧敷の方へと移つて行つた。

新橋の七人組の一人で、新聞の廣告などでよく見る顔の妓が、二三人の妓と一緒に其處に來てゐた。肥つた鬚の濃い四十五六の紳士風の一人の男は、その妓達に押されるやうに

なつて、時々笑つたり話しかけたり、酒を飲んだりしてゐた。丸髻の意氣な顔が見えたりお納戸の地に黒くボツボツ縫ひをした襟が映つたり、よくまアあんなに大きく出ると思はれるやうな庇髪が立つたり、出方の股引が動いたり、町の女の島田髻が見えたりした。しかし何處にもそれらしいものがなかつた。

……ふと、その雙眼鏡は、長い間動かずに一ところを凝視してゐた。舞臺から數へて五つ目、綺麗な意氣な丸髻の細君がゐると思つて見てゐた眼は、ふとその隣に二三人のそれ者らしい女のある方へと移つて行つた。——其處に、舞臺の方を向いて、此方に横顔を見せてゐる色の白い小づくりな女、それが確かにお園だ。男の胸には三年前の其女を背景にして、さまざまの舞臺が繪巻物のやうになつて、急に簇つて集つて來た……

「居て？」

細君が笑ひながら訊く。

亭主は點頭いて見せたが、雙眼鏡を取つた後の顔は、矢張笑を帯びてゐた。「それ、其處に、花道の向ふに子供をつれた細君がゐて、その向ふにかすりの羽織を着た書生がゐて、その二つ向ふ……」雙眼鏡を顔に當てた細君に向つて、亭主は小聲で教へてきかせて、「ゐたらう？」

「鳥渡解らないけれど……そこに藝者が三人ばかりゐますねえ……」

「その中で、一番こつちにある……そら此方に向いた！」

「あゝゐた、ゐた」

雙眼鏡はかう言つた。

「暫くしてから、「一生懸命で見てゐるのね」

舞臺では、若い髻に結つた武士が刀を抜いて、他の一人の田舎武士らしい男と丁々發矢と斬り結んでゐた。菊の花は依然として咲きそろつてゐた。若い武士の鋭い刀が相手の横腹を刺したと思ふと、相手の大きい男は挫と後に倒れて了つた。其處へ、白鬚の老人だの娘だのがぞろぞろ出て來た。

三

「鳥渡、行つて來る。お前、一緒に行かないか」

幕が下りると、亭主はかう言つて身を起した。

「一人で逢つていらしやい」

細君はわざとかう言つて笑つてゐた。

振返つて見ると、男の大島の羽織は花道から出方の出てゐる細い廊下へと見えなくなつて行つた。

細君はほつれんとしてゐた。前の櫛にゐる庇髪の娘がすぐ前を通つて花道の方へ出て行つたり、出方が此方の客に壽司と茶とを持って来りする間、細君はどつと太い大きい縦縞の幕を見てゐた。幕の内では、道具を入れる音が絶えず聞えて、幕の下の方がぼつと電氣、明るくなつたりした。

待つてゐる間がかなり長かつた。細君は筋書を取つて、この次の世話物の筋を読みかけて見たが、二三行讀むと、すぐよして、今度は土瓶から茶を一杯茶碗について飲んだ、茶は温く苦かつた。餘程自分も出かけて行つて見ようかと思つた……。

拍子木が入る頃になつて、亭主は漸く歸つて來た。

「おましたか？」

「うむ、ゐた、ゐた。」

「さうでせう、誰もお客と來てゐるぢやないでせう？」

「うむ……」

「何で話してゐたの」

「其處の廊下の處で話してゐたんだよ。茶でも飲みに行かないかつて言つたけれど……今度は幕間が短いからつて行かなかつた……」幕の明くのを見ながら、「いい、藝者になつたね。尤て見違へるやうになつたね。……もう」今ぢや抱が三人ゐるんだつて」

「さう……」

細君はかう言つたきり黙つて了つた。男も黙つて舞臺の方を見てゐた。舞臺の背景には海が見へて、二つの岩には白い高い波が碎けてゐた。白堊の土藏に續いた座敷には、品の好いお上さんとちよん鬻に結つた主人とが丸い瀬戸の火鉢を挟んで子息の縁談のことを話してゐた。其處へ子息と惚れ合つてゐる町の娘が出て來た。

四

「奥さん！其處」

かう聲を懸けられた細君が仰向くと、银杏返にして髪をふつくり出したお圓が其處に立つてゐた。

「此方にお入んなさい」

かう言つた時には、お圓は既に其處から櫛の間を傳つて此方に來ようとしてゐた。誰が

見てもすぐ分る意気な姿は、四邊の人々の眼を集めるに十分であつた。女は櫛に入らうとする處で、鳥渡躓いて

「あら大變！」と言つて、細君の肩につかまつたが、

「お免なさい。もう少しで」

かう言つて、櫛の空いた處に坐りかけると、

「お敷きなさい」

自分の敷いてゐた敷物を取つて、細君がすゝめた。

「いゝえ、大變よ、そんなこと！」かう言つて女はそれを押しかへした。

「此頃は好いんですつてね」

「いゝえ」

かう言つて、すぐ言葉をついで、「お宅へ上らなけりやすまない、すまないつて、始終中思つてゐるんですけれども……でも、奥さんのことなんか忘れたことはないんですよ、これでも」

「随分久し振は久し振りね。三河屋で逢つた切りですれ」

「えゝ」

かう言つて、男と眼を合せて笑つた。其後も半年ほど女は男と逢つてゐた。

「お嬢ちゃんやお坊ちゃん方は大きくお成んなすつたでせうね」

「えゝえゝ、總領の娘は十三ですからね、私より丈が高いんですもの」

「坊ちゃんがぬらつしやいましたね、そら、二番目の坊ちゃんが……何と仰しやいましたつけ、さう、さう、政行さん。成長くおなんなさいましたでせうね」

「成長くなりましたよ」

「もう、あの、末の嬢ちゃんきり、お跡はないんですか——」

細君は笑つて見せた。すぐ「また、お出なさいよ、たまには？」

「是非、伺ひます」軽く首を下げて、「さう言へば、奥さん、よく一緒に参りましたね」

「本當にね」

亭主は向ふを向いて黙つてゐた。さつき廊下で、「随分、御無事ね。……風言でせう、そんなことはないでせう。下谷によく入らつしやるつて言ふことを聞いたわ。お妻姐さんだつて言ふ話よ」「本當のことを言はないと、私、またいぢめて上げてよ。私、丁度好い。うそですよ。そんなことなんかない」「こんな會話を短かい間に取交したことを繰返して考へてゐた。別れた時に少しもイヤな心持を持たなかつただけに、その短かい言葉の中にも柔ら

かなやさしい情がこもつてゐた。

幕が明きさうになつたので、女が立ちかけると、

「一幕、見てお出でなさいよ。此處で」かう細君が留めた。

「好いぢやないか」かう男も言つた。

「ぢや、さうしますわ。久し振で、奥さんと一緒に一幕見て行きますわ」お園は細君と並んで、再び坐つた。

幕はやがて明いた。舞臺は田舎じみた小さい家であつた。粗末な衣服を着た娘と弟子らしい男とがゐた。其處へお爺が出て来て、筋は段々複雑になつて行つた。……お園は熱心に見てゐた。それにも拘らず、その眼は絶えず細君の方を見たり、男の方を見たりしてゐた。男の眼と女の眼とは時々宙に逢つてゐた。何うかすると三つの眼が一緒に邂逅して、互にドキマギしたりした。

「橋屋は矢張旨いわれえ」

女はこんなことを言つた。

五

「今日、お終しまひまで見て行くのかえ？」

「何うでも好いよ。所作はまたいつでも見られるから」

「連れにわるくはないのかえ？」

「おこと姐さんだから、譯を言へば、構はないわ」

「ぢや、もう一幕見たら、一緒に出ないか」

女が躊躇してゐるのを見て、

「都合がわるいかい？」

「さうおしなさいよ、久し振りぢやないの？ 此處ぢや本當に話が出来ないから」傍から

細君もさう言つて誘つた。

「遅くなりやしないよ。久し振りで、三人して銀座でも歩いて見ようぢやないか」大丈夫だよ、お前一人を騙つたり何かするやうなことはしないよ」といふ眼附を男がして見せたので、

「ぢや、さうしますわ」

かう言つて、女は男と眼を合せた。

幕はもう下りてゐた。人達がぞろぞろ土間から花道へ、花道から廊下へと出て行つた。出方が、焔をした徳利を、十二三本も臺に載せて運んで行くのが見えた。

其處へ、奇麗なお酌が来て、「小妻姐さん、其處にゐるの」
「今、行くよ」

「姐さん達が心配してゐてよ」

人々は皆なこの土間の方へ眼を集めた。何ういふ人達だらうなどといふ觀察の眼を向け
たものなどもあつた。小妻は花道に出て、其處に待つてゐるお酌と伴れ立つて向ふに行つた。

六

男が小妻を誘ひ出してゐる間、細君は電燈の明るい入口のところ立つて待つてゐた。
やがて男が出て来て、あとから小妻が続いた。

小妻は横縞のラシヤの七分コートを着て、駱駝の襟巻を幅廣く襟に巻いてゐた。下足の
出す下駄を穿いて、三人はやがて戸外へ出た。

夜風はもう寒かつた。電車はをり／＼高い唸聲を立て、通つて行つた。軒を並べた茶屋
には、男衆だの女中衆だのが、店の前に立つたり坐つたりしてゐた。もう迎へに来てゐる
自動車などもあつた。「寒くなつてれ」女は小聲で男に言つた。細君は二三步先きに歩いて
ゐた。

「おい、何處へ行く？」

遠くから聲をかけると、細君は立留つて、

「もつ、何時？」

「まだ、十時位だ」

「ぢや、饅でも食べますか」

「もう遅いだらう。行つたつて駄目だらう。」

「もう饅、んかよませうよ」かう傍から小妻も言つた。

「ぢや、まア、其處等、プラプラ歩かさ」

銀座の賑やかな通りは、其處からいくらもなかつた。橋を渡ると、其處には灯が流るゝや
うに明るい光を漲らしてゐた。歩く間、小妻は細君と昔のことなどを餘念なく話し合つて
ゐたが、不意に、

「さうでせう、ほら御覽なさい」

先に歩いて行く男に縋るやうにして、「奥さん、旦那さんがさつき立派なお口を利いてゐ
らしたのよ。此頃ぢや、もうすつかり奥さんのお傍ばかりだなどと仰しやつてゐてよ」

「男は暢氣よ、矢張……」

「さうですれ、男の方は本當に暢氣ですわね。もう、貴方なんか、お堅くなつても好い時分よ」ふと思ひ出したといふやうに、「さう言へば、奥さんと一緒に邪魔をして上げたことがあつてね」

「さうだつたね」

思ひ出して細君も笑つた。細君にも、自分ながら何うしてあの時分はあゝいふさげた心持になれたかと思はれた。妹か、仲の好い友達のやうにして二人はよく一緒に出て歩いたばかりではなく、女の口裏から夫の細かい氣分までも探し出して、それを打明けて話の種に たりした。「さう、そんなことを言つたの？ 随分、變な處のある人でせう」などと話し合つた。

「男つて面白いものね」

いつもかういふ風にして話した。主人のぬない時でも、小妻は始終中遊びに行つて、三味線を弾いたり、子供と戯れて遊んだりした。男つていふものはといふ言葉に餘り多く使ふので、「そら、また、男つていふもの」が出たなどと言つて笑つた。

通りの角に近い處に、灯の明るくかどやいたカフェがあつた。そこを通り過ぎやうとして、男は一寸覗いて見たが、

「酒を一杯つき合つても好いね」

振返つて、かう言つて、返事も聞かずに、扉を押して中に入つて行つた。女もあとから續いた。

客は其處に一組、彼處に一組といふ風に、チラホラ居るばかりで割合に靜かであつた。

三人は右の方の隅のところに行つて腰をかけた。

「ウキスキーを一杯つき合はないか。」

「私？」

小妻はかう言つて細君の方を見て、「奥さんは？」

「私はベルモットか何かの方が好い」

「私もおつき合しても好いわ」

色の白い、綺麗な、丈の高い女給仕が遣つて来て、小さいコップを其處そこに並べて、命ぜられた酒を罎かからついて行つた。

「あの頃のやうに、私はもう飲まないんだから」細君はかう言つてベルモットを甞あるやうにして飲んだ。

「あの頃は召上つたのね。私も随分飲んだけど……私より召上つたわ」

「さうでもないけど……」細君は片頬を笑ませて見せた。

細君と男とは並んで腰をかけてゐた。男は女給仕を呼んで、もう一杯ウキスキーをコップにつがせた。小妻のコップにも女給仕は次手について行つた。

男は小妻の顔の段々赤くなつて来るのを見てゐた。三年前の戀の血が同じやうにそこに流れてゐるのを男は忽ちに見て取つた。

「奥さん、私赤くなつたでせう？」かう言ひかけた聲の中には、昔のなつかしい人に凭れかゝるやうな調子が名残なく出てゐた。小妻はまた小妻で、「この奥さんさへかういふ風でなけりや好いんだけれど……ちつとも普通の人のやうなやき方をしないもんだから困るわ。……此前だつて、この奥さんの爲めに別れるやうな事になつたんだから……。好いわ、今度は、奥さんに知らせないやうに、祕密にするから好いわ」こんなことを考へながら、段々赤くなつて行く男の顔を見てゐた。

「此頃は木村さんは、何うした？」かう男が訊くと、

「木村さん、死んだわ」

「死んだ？」

「もう一年半になるわ」

「それは驚いたね。さぞ泣いたらうね」

「泣きもしないわ」

「でも、随分、大騒ぎをしてゐたぢやないか」

「矢張、薄情なんですよ」細君の方へ向いて、「かういふ稼業をしてゐると、何うしても、

さういふ風になりますね」

「そんなことはないでせうがね」

「いゝえありますよ」

「杉浦さんほ？」

「杉浦さん？」今、屹度、臺灣に行つてゐるでせう？」あの時分逢つたきり、すつかり

逢ひませんよ」

いつか女給仕が来てまたウキスキーをついで行つて了つた。料理の皿も二品ほど運んで来た。

傍にあるのについさそはれて、小妻はそのコップを取上げて、もう一口飲んだ。酒は酔つた腹の中を更に燃えるやうにして通つて行つた。小妻はスースー呼吸をしながら、火のやうに赤く熱した頬を両手で押へてゐた。

「まア、赤くなつた」

細君はフォークとナイフを運ばせながら、此方を見て言つた。

女の眼は鋭敏に働いてゐた。「今に、君が便所か何かに立つに違ひない。その時こそ……こんなことを考へてゐた。男もナイフをつかひながら、をり／＼女の方に眼を注いでゐた。「何か食はないか」

「でも、顔があつくつて仕方がないんですもの」かう言つて、矢張、頬に兩手を當てゝゐた。ふとテーブルの下で、足を觸つたものがある。男の足だ。

「ぢや、御馳走になるわ」わざとこんなことを言つて、フォークとナイフとを取りながら、男の足に自分の足を載せて、それをそつと押して見た。男も押した。

肉を切つて食ひながら、それとなく男の顔を見た。男は平氣で下を向いてフォークをつかつてゐた。

女は細君の方を見た。何も知らない細君は、其時丁度切つた肉をフォークに刺して、それを口に入れやうとするところであつた。女は言ふに言はれない勝利を感じた。

「果物は何が好いんだ？」男はかう言ふ中にも、女の足を軽く押してゐた。「私は林檎」細君が言つた。

「私は柿」女は可笑しくなつて急に吹き出した。

「何うしたの？」

「だつて、今の言ひ方が子供見たいだつたから、可笑しくなつて了つて……」女は猶笑つてゐた。

便所に行くに相違ないと思つてゐた細君は、勘定をする頃になつても、そこから立上らうとしなかつた。女はそれを誘ふつもりで用もない身を起して自分から先へ廁へ行つて見た。しかし細君は男の傍を離れやうとしなかつた。女は失望した。

勘定をすまして三人は出かけた。

細君が一番先に立つた。男がそれに續いた。女はまたその後から續いた。ドアを明けて細君が外に出るのを見ると、女は足を早めて男の後へ寄添つて、ドアのところに歩いて行つたが、インパネスのかげから男の手を強く握つた、

「ぢや、屹度れ、明日れ」

男は點頭いて見せた。

外へ出ると、細君は電柱の處に立つて待つてゐた。

二人の乗る方の電車が早く來た。

「ぢや左様なら、奥さん、且那樣をお願ひしてよ。」かうした女の聲が後から聞えた。

あ の 女

「え、君も關係した？ あの女に。」

痩せた方の男は驚いたやうにして言つた。「本當かえ？。」

「本當とも。」

肥つた方は笑つて見せた。二人の前には盃があつた。

「本當かな、何だか虚言のやうだな。」痩せた方は肥つた方の顔を見て、「君は、あの土地に餘り行つたことがないぢやないか。」

「或は君よりも少し前かも知れん。」

「と言ふと」と考へて、「何時頃だえ？……」再び考へて、「それにしても君があそこに行つて、あの女に關係したとは何うしても思はれんがね。」

肥つた方は得意さうな色を顔に浮べて、「昨年、さう、もう一昨年になる。一昨年の春別れた！。」

「へえ。」

「それも、君、随分引張られて居たんだよ。別れる時は例の辛い思を嘗めさせられたんだよ。」

「へえ。」

肥つた方の顔を再び見て、「さうかれ、ちつとも知らなかつた。」

「でも、何かそんな話が出たことがありさうなものだ。君も随分長い間關係してたんだらうから。」

「さう」額に手を當てし考へて、「さう言へば、あれが君かしら？ 稻毛に行つたり大宮に行つたりしたと言ふのは？」

「それや、僕だつて、大宮や稻毛に行つたがね。それだけぢや解らんよ。そんな處には彼奴等はいつでも行くんだらうから。」

「其のお客と稻毛に行つた時、大きな蛇が居て吃驚したといふ話をして居たことがある。」

「なら……僕だ。」

肥つた方は笑つた。

瘦せた方は、兼れて想像して居た影の中から段々その本體が解つて來るといふやうな考へ方をして居たが、ぶつと笑つて、「その蛇の話をした時は、僕等は何んな風に仕て居たと思ふ？」

「それは大抵想像されるよ。」

「何うせさういふ場所さ。さういふ風にした具合は、何うしても蛇だ。蛇の男に絡みついで居る彫刻がよくあるだらうツて言つて聞かせると、蛇は大嫌ひ、よう後生だから蛇の話だけはよして下さい……さう言つて、それから稻毛で見た蛇の話が出たんだ。」

「さうだ、あの女は蛇が嫌ひだつた。その癖蛇のやうな女だがね。」

「本當だ……。」

瘦せた方は種々なことを思ひ出すといふ風にして言つた。

其の女の持つて居る眼、髪 肌——その肉體の男に與へる歡樂の總べてが、同じやうに思ひ出されるといふやうに二人は暫し黙つて居た。

「兎に角、面白いな。君が關係してたツて言ふことは面白い」瘦せた方は盃を唇に當て、ぐつと飲んで、「ぢや、一つ上げやう！ 別れない中に、この話が分れば猶面白かつた。あいつの油を取つてやるんだつたな……で、果して其のお客が君とすると、かなり深い交情らしいことを言つてたよ。」

「さうかれ。随分あの女には僕もつき込んだからな。」

「何うして別れたんだえ？ 別れる時の話をしてきかせ給へ。」

「何ア、別に意味もないんだ。女が何うも倦きるらしいね。金を引奪くる……そればか

りぢやない。それに君にも分るだらう。商賣だから何うせさういふ處もあるには相違ないが、あの女は何方かと言ふと、惚れほい方だつた。惚れほいからぢき飽きるんだね。」

「さうだ、常に烈しく愛されて居なければ満足が出来ないツて言ふ女だ。」

「君も辛い思をして別れて来たね？」

肥つた方はかう言つて大きな體を搖して笑つた。

瘦せた方も笑つた。

「矢張同じやうな室で、同じやうな臺辭で別れて来たんでせう。兄妹になりませう？ さう言はなかつたかね？ 言つた？ さうだらう。四十八手の中に押して離すツて言ふ手があるさうだが、あれだね、奴のは？ それがまた馬鹿に旨いんだから。相手に本當に思はせるんだから！」

「いや、あれは本當なんでせう。」

「本當？ さあ本當とも言へるかも知れないね。眞剣に惚れたり覺めたりしてゐるんだから。其處に入つて来た老妓は、二人の方を見て、

「何を話して居るんですよ、惚れたの何ツて？」

かなり酔つて居る肥つた方は、其方を向いて、「まア、聞いてる、面白い話なんだ。關係

した男が二人で、その關係した女の惚氣 言ひこをしてる處なんだ。」

「馬鹿馬鹿しい、そんな話おもしろくないよ。」

老妓はよく解らぬなりにかう打消すと、

「馬鹿々々しいことがあるもんか。女が聞きたいツて聞かれないやうな話ぢやないか。」
かう言つて瘦せた方を見て、「君は何の位の間に一緒に居た？」

「昨年、一昨年の秋だ、初めて奴に逢つたのは——、で、別れてからまだ半年位にしかならない。」

「ぢや、まだ傷痍が治らない方だね。」

「いや、もう大分治つた。奴が居らや駄目だが、この土地に居ないだけ、それだけあきらめがつく。」

「何處かへ行つたのか？」

「遠い處に行つたさうだ。よくは知らないが、大連あたりに行つたんぢやないかと思ふ？」

「大連？ えらい處に行つたもんだ。情人でもあつたのかね？」

「僕の別れた時には一人か二人あつたやうだが、その爲めだか何だかそれは解らない。」
始めはよく解らなかつた老妓も、段々それと話の筋道を辿つたらしく、「ぢや、かうだね。」

此方の」の肥った方を指して、「此方の關係した女に、此方も關係して、それでその話を二人でしてゐるツていふ譯なんですれ。」

「さうさ、今解つたのか？」

「まア殿方は暢氣れえ」老妓は傍に座つてゐる二十二三の綺麗な妓に言つた。

「女にはさういふ氣分にはなれないだらう？」

肥つた方が若い妓に言ふと。

「なれるわ！」

「なれるもんか、表向ぢや綺麗なことを言つて居ても、一腹の中ぢや敵味方だらう！」

「殿方だツて、さうでせう。」

「ところが、男はさうざやないんだ。眞劍になる時には、出齒庖丁でも振廻はすが、落着くと平氣になることが出来るんだ。餘裕があるんだ。女だから勘忍してやる。男に歡樂を與へて呉れる女だから勘忍してやるツて言ふ氣分があるんだ……なア、君？」

瘦せた方も點頭いて見せた。

「でも、姐さん方になると、女でもさうでせう？」

「それはいくらかはさうれ。」

老妓は靜かに言つた。

妓達は酒を勤めたり、三味線を弾いたりした。それは川に臨んだ室で、潮が暗く硝子障子の外に光つてゐた。對岸の燈火の長く水に落ちてゐるのも見えた。

瘦せた方も肥つた方も元氣に話し合つて居た。時事問題だの、社會問題だの、文學上の話などもした。しかし其女のこととは絶えず二人の胸に上つて來るらしく見えた。

突然、肥つた方が、

「君は、何處を根城にしたれ？」

「あの向ふの角の二軒目？」

「福の家？」

「イヤ、その此方の、門の奥の方にある家？」

「彼處か。」

かう言つて、點頭いて、また別の話をした。

其女の持つて居る肉體は、二人をして忘れることの出来ないある物を思はしめた。逢つてから三度目、その頃から同じやうにして二人は其女に捉へられた。柔らかな靜かな氣分、

心も體もすっかり男に投出して縋つてゐるやうな態度、羽がひしめにしめられて段々離れることの出来なくなるやうな心持——そのなりの追憶が絶えず二人の頭を通つた。

あの艶のある、唄など唄ふと途中でほつり絶えて了ひはせぬかと思はれるやうなあの聲、それを二人は常に聞いた。その聲の電話にかゝつて來るのを聞いた時には、二人は同じやうにして胸を轟かした。電話をかけて來る時には、其女は屹度金を用意して持つて居て、男に心配をかけさせずにすませた。

派手かと思ふと、質實なところもあつた。惚れてゐるのかと思ふとさうでないやうなところもあつた。もうかうなつちや駄目よ、遁しやしないわ。女はいつもかういふ風を見せた。心持が絶えず變るやうな女であつた。日に由つて自分の好い悪いがあるばかりでなく、一時間の中にも變つた。十分の間にも變つた。蛇のやうな女——

情人で情人を引き、客で客を釣ることも上手であつた。

「君、何か紀念物を貰つて持つてるだらう。」

肥つた方がまた聞いた。

瘦せた方が點頭いて見せた。

「何を持つてる？」

「君は？」

「まア、君から話し給へ。」

「僕は奴の子供の時分から弾いてゐた三味線を貰つた。」

「僕は奴の前の情人だつた畫家の書いた美人畫の軸を貰つた。」

二人は一緒に笑つた。

「厭だれえ、本當に、矢張り氣にかゝるんだよ。先程からちよい／＼と掛出すところを見るよ……」かう言つて、老妓は手を出して、「十錢お出しなさいよ」瘦せた方にも手を出して、

「貴方もお出しなさい。」

「姐さん随分面白いわれえ、二人から一人の女の惚け賃を取れば——。」

傍に居た一人の妓は笑ひながら。

言つた若い綺麗な妓は、「それ御覽なさいな、なんでもないなんて、矢張り氣にかゝるのよ。」

お酌が踊をおどる頃には、もう二人は随分酔つて居た。瘦せた方は、唄が上手で、端唄の「里を離れて」などを唄つた。肥つた方は苦しきうに、後腦を柱に當て、顔を仰向かせて眠つてゐたが、やがて太い聲で、「潮來出島」を唄つた。

其女の教へた唄が多かつた。

夜はやがて更けた。かつほれをお酌達の踊つた後はしんとした。藝者達は煙草入などを出した。

酔つて倒れて居た瘦せた方の客は、俄かに起上つた、「おい、君。別れる前に、奴の爲めに健康を祝して一杯飲まうぢやないか。僕等の爲めに蛇であり、狼であつた女の爲めに飲むのも亦可ならずやぢやないか。」

「さうだとも。」

かう二人は熱心に其女の爲めに前にある盃の酒を飲んで。

妓達は呆れて見て居た。

やがて二人は歸る支度をした。

肥つてゐる方はインバネヌを老妓に着せて貰つてゐたが、「男ツて甘いもんだらう。けれどな、おい、甘いのが男だぞ。男の甘いのが本當に女には解るまい」かう言つて陰眼きながら廊下に出て行つた。

椿の花

停車場の方へ行くところに、此方から上つて行く低い坂がある。その坂に懸らうとする處に細い川が流れてゐる。板橋がかゝつてゐる。

その川では、時々近所の染物屋の男が布を晒してゐたりする。晴れた日には、川の中に入つて障子を洗つてゐる男などもある。坂の右側は竹藪で、その奥からは、春は、野椿の紅いのが見えてゐた。

私は毎日其處を通つた。

私はその坂を通る度に何故かその女を思ひ出した。眉の濃い、肌の白い、笑ふ時眼のところにも何とも言はれない愛嬌のある表情をする女だ。と、

「だつて、私のやうなものな」

かういふ口の利き方をする柔しい和らかな気分がいつも私の胸に漲つて來た。

その翌朝、その女は私の室に膳を運んで來た。そして給仕をした。静かに坐つてゐた。

何もないやうに、何も知らないやうに、昨夜のことはあれは夢ではなかつたかと思はれるやうに――

「今朝は寒いね」

私が言った。

「寒うおますな」

女はかう言つてにつこり笑つた。飯を盛るための白い手首が動く。女は顔を少しうつむき加減にしてゐた。飯を盛つた椀を盆に載せて此方に出さうとする時に私の顔を見た。

「梅は何うだらう？」

「丁度ようおますわ」

「盛りだらうか？」

「盛りだつて言つてまいた。昨日歸つて来た人がナ――」

かう言つて、「梅、お出なはる？」

「行つて来やうと思ふんだ。折角、来たんだから」

「さうな、行つて来なはれ」

また白い手首が動く。長い襟足に白粉の痕が残つてゐる。

青い麥畑が丘のやうなところに廣く見えてゐる。古い小さい驛――たしか角のところに分署があつた。草鞋を下げた家の前では、脚絆をつけた旅人が、縁臺に腰をかけて新しい草鞋を上さんに取つて貰つて、そしてそれを穿きかへてゐた。驛を外れると、碧を湛へた谷川が流れてゐた。

私はその驛に五日ゐた。

一晚泊つて、明日は名高い梅を見に行かうと思つて汽車を下りてそして其處に五日ゐた。其處の停車場は丘の上にあつた。私は夜の九時頃に着いた。私は十日ほど彼方此方を旅行して、其時はもう東京に歸らうとしてゐた。もし、私がある大きな停車場で「梅花満開！」といふ廣告を見なかつたならば、その停車場は唯闇の中に過ぎ去つて了つて、他の普通な小さな停車場と同じやうに、私の生涯に遂に何等の印象を残さなかつたであらう。「梅花満開！」その四字が私にある生活を展開させる因をなした。

その停車場が段々近くなつて行つた。灯がチラチラと下に見える。谷川の流れてゐる音が涼々と聞える。山が黒く夜の闇を劃つてゐる。

「此處に旅館がありますか？ 一晚泊りたいんですが」

改札所にゐた若い車掌に私は訊いた。

「すぐ其處で聞いて御覽なさい」

若い車掌はかう言つて闇の中を指した。そこには明るい大和障子が見えてゐた。

私は大きな鞆を下けたまゝ、大和障子を明けて入つて行つた。と、徳利、膳、鍋——そんなものゝ混雜と置いてある向ふの方に一人の肥つた中婆さんが、袒になつて灸を据ゑて貰つてゐるのが私の眼に入つた。

「泊めるには泊めるが、もつと好いところがあるから其方へ行つて泊んなはれ」

かう言つてその中婆さんは教へて呉れた。

中婆さんはイヤににや／＼笑つてゐる。……その顔が分明と今でも見える。

闇の中を私は歩いた。

男が私の鞆を持つて、先に立つて歩いて行くが、それが何うかすると見えない位に暗い暗い夜だつた。

足元がわるいので、私は黦くとも二三度轉んだ。坂になつてゐて、そして路がデコボコしてゐる。汽車の窓から見た時には、灯がチラチラ見えてゐたが、それも何處かに行つて了つた。町が何處にあるか、それすら解らなかつた。

深い闇が続いた。と、其處から——その暗い闇から、新しい生活が俄かに開けたやうに明るい障子と明るい灯と明るい座敷とが私の前にあつた。

帳場に坐つてゐた濃い鬚の男と、鍵にかけた鮎と、鮎と、徳利と、三味線の音と。

「およれさん！」

かう呼ぶ聲が今も私の耳にある。

顔を少し赤くして、ほつてり肥つた色の白い横顔を此方に見せて、「だつて、私のやうなものけナ」かう言つて此方を見る眼附の可愛いさ！

「およれさん！」

かう何處かで誰かと呼んでゐる。

「え、もう、ほんに、困つた人達」

かう言つて其女は入つて來た。濃い眉を擧げてゐた。

「いゝえの」

さういふ言葉の調子が、今でも私の體の何處かに潜んでゐる。

私は何處かで次のやうな話をした。

「不思議なもんだね、君。それが何うしても忘れられない。その女は今だに、僕の體の何處かに住んで生きてゐる。年月をいくら隔てても、それでも、女と僕との間にはまだ何かがある……。實際不思議なもんだね、その五日が——そこに泊つてゐた五日が、僕の生涯に取つては、非常に大きな出来なんだから、他の多くの女に對する好尚なんて言ふものが、今だにすつかりその女に支配されてゐるんだからね。」

「さうかね」

これを聞いてゐた友達は、かう言つて不思議さうに私の顔を見た。

「まだ、その時分は、君は、餘り奴を知らなかつたから、それで、イリュウジョンでさう深く印象されたんだらうね？」

友達は續いてかう言つた。

私は言つた。「それもあつたかも知れない。しかしそればかりぢやない。僕はもうその頃かなり女を知つてゐたからね。その時だつて、自分から進んで言出した位なんだからね……。それは僕は今だに思ふがね、耽溺といふ心持を心から味つたのは、その五日間だれ。その五日間ほど耽溺したことは未だにないよ」

「さうかね。その女は何うしたらう？」

「何うせ。今時分は、人の噂になつて、子供の二三人も持つて、眞黒になつて働いてゐるのさ！ それにきまつてゐるさ！ けども、今でも、僕はその女に逢ひに行きたいと思つてゐる。僕の生涯の中に、もう一度その女に逢はずには置かれないうやうな氣がする。そつちの方に旅行すると、いつでも其處にもう一度行つて見ようかと思はないことがない……。少くともその女は一生僕の體の中に住んで生きてゐるよ」

「不思議だね」

「本當に不思議だね。僕にはその女よりもつと深く關係した女は幾人もある。三年一緒にゐた女もある。それに綺麗な、肌の柔かな女も幾人もある。しかし、さういふ女達はちき忘れて行つて了ふ。十年と心の中に生きてゐる女は少ない。それなのに、その女ばかりは、益々その影が濃くなつて行くんだからね」

「さうかね」

友達は私の顔を見てゐた。

女の生れた町——そこを私は想像した。

山の奥の、川の流れてゐる、静かな繪のやうな町だ。

ある時其處に旅をした友達が、其處から私に繪葉書を二枚よこした。一枚は町の全景を撮つたもの、一枚は料屋の庭を撮つたもので、料理屋の庭の方には、鶴の置物が置いてあつて、池に臨んだ欄干に土地の藝妓が三四人立つたり坐つたりしてゐた。私はそこに女があるやうな気がして、凝つとその女達に見入つた。一方の全景の方は、私は小さな額に入れて、それを書齋の上のところに掛けて置いた。

私はその町の寫眞を長い間立つて見てゐることなどもあつた。

「姉はんが此處にゐますよつて来てますけどもナ、町が戀しうおますわ」
女がかう言つたを私は時々思ひ出した。

ある藝者が來た。

「おれさん！」

かう誰かが言つた。

「君はおれつて言ふの？」

「え」

「おれつて言ふ名は、僕に取つては忘れられない名だよ」

「さう」

かう言つてその藝者は笑つてゐた。瘦せた、眼の表情のある女だつた。お納戸のお召に白い藤のくつきりと出た派手な襟をしてゐた。唄が旨かつた。

五日間！

何といふ耽溺だつたらう。私はその爲め梅を見に行かなかつた。梅を見にわざわざ下りた古驛に、その驛も見ずに五日間ゐた。

私は其時はもう金を澤山持つてゐなかつた。私はその鬢の生えた主人に、時計を出して金を借りた。

「かういふものは分暑で喧しいですけども……お預りだけして置ませう」

かういつて、イヤににやにやしてそして時計を持つて行つた。金を五圓持つて來た。

「もう、梅見に行くのはよした」

かう私は女に言つた。

何といふ耽溺だつたらう。私はその旅館の奥の一間に籠つて、行火をしてそして寝てゐた。女は絶えず傍に来てゐた。

その一間は奥に離れてゐた。始め寢た室は、母屋の八疊だつたが、翌日からその奥の方の一間に行つた。母屋の八疊には、床の間に大きな扇を描いた輻物がかゝつてゐて、長押には徳不孤といふ大きな額がかゝつてゐた。襖には田舎廻りの繪師の書いた拙い四季の山水が張つてあつた。

客の騒ぎが濟んでから、暫く経つても女は來なかつた。時計が一つ鳴つた。私は眠られずに床の中に輾轉反側してゐた。「お湯に入つてから」かう言つた先程の女の言葉を思ひ出してゐた。枕元の行燈は天井に大きな影を映して、灯子の動く度に、その影は絶えずチラした。

期待……期待から起る懊惱……うす暗い静かな空氣で包まれたその一間に満ち渡つたその懊惱……。

何處かで風呂の湯を汲み出す音が微かに聞えてゐた。

軽い足音も何もせずに、やがて襖の隅の方がすうと静かに開いた。と思ふと、背の高い、スラリとした女の姿が其處に現はれる。薄暗い静かな空氣の中に……

薄く化粧をした艶の好い白い顔がやがて其處に來た。

行燈の灯子がチラチラした。

「あなた、坊さんある？」

「あるよ」

「幾人？」

「二人」

「なまこはん？」

「一人が女で、一人が男」

「可愛いだつしやる！」

「うむ……」

で、沈黙が続いた。

天井に映つた行燈の影が微かに靜かに動いてゐる。

隣の間の扉の聲が高く聞える。

暫くしてから、

「だつてナ、私のやうなものはず」

かう言ふ女の聲がした。

行燈の影が頻りに動いてたぬ。襖の四季の山水の上には、女の影が黒く映つてゐた。翌日は奥の方の一間に行つた。丸窓などのある室で、傍の障子を明けると、落葉の溜つた庭を隔て、向ふに山が高く見えてゐた。室の一隅に置いてある唐机の上には、黒塗の硯箱が巻紙と一緒に載せてあつた。

その傍に私の鞆が置いてある。革のついた小さな鍵が其處等に轉つてゐる。鞆の中には家への土産に買つた種々なものが入つてゐる……。俄かに湧いて出たやうな新しい生活は不思議な氣がせずには居られなかつた。

女の柔かなやさしい氣分がすっかり私を擒にして行つた。

女は銘仙か何か着てゐた。そして赤い色の交つた派手な襟をしてゐた。茶を持って入つて来て長い間話して行つたりした。

二日目には、私はもう女と離れることが出来ないやうになつてゐた。實際、何といふ耽溺だつたらう。私に、金があつたら、そのまゝ女を伴れて来て了つたかも知れない。私は女が僅かの金で此處に来てゐることなどまで聞かして、東京に歸つたら、屹度迎へに来るからなどと言つた。

「ほんまどすか？」

「うそなんぞ言ひはしない」

「でもな、私のやうなものはない、何も出来まへんでな」

「何も出来なくつたツて好いき」

「こんな話をもした。」

夜になると、客が彼方此方から遣つて來た。女も晝間のやうに、此方ばかり出てゐる譯には行かなかつた。私は女が別の室に行つて、別の男と笑たり戯談を口つたりしてゐるのを見るに堪へなかつた。今までに経験したことのないやうな男性の嫉妬を私は感じた。それに、あゝした優しい女を多くの人の手にまかして置くのも、いかにも殘酷のやうな氣がして仕方なかつた。私は奥の一間で一人で懊惱してゐた。

「金さへあつたら」

私は旅でつまらなくつかひ果した金を此上なく惜しく思つた。

97
モウパッサンの作に「フランチェスカ」といふのがあつた。イタリアに旅に出かけた男が、途中で女に引かゝつて、とうとうイタリアに行かずに歸つて來るといふ話を書いたも

のだ。私は、それを其一月ほど前に読んでゐた。私はそれを思ひ出した。

縁側を通ると、室の中で、他の男と一緒になつて、女が笑つてゐる……。時計を抵當にしてから、私の信用は頓に落ちた。「この客は絞りたいくつてももう絞れない！」かう主人は思つたらしいかつた。私は紙衣の身の憐れさをつくづく感じた。

私は行火に當つて、掻巻をかぶつて寐てゐた。私は手を鳴して女を呼んだ。女は來なかつた。

用事は別の女が聞きに來た。

「何うしたえ、およれさんば？」

「およれさん、忙しいんだつしやる。御用は？」かう言つて其處に突立つてゐた。

三味線の音が聞えてゐた。障子を明けて覗いて見ると、二階の間には、五六人客が來て飲んでゐるらしく、ランプが障子を明るく闇の中に見せてゐた。女は其處にゐた。

「金さへあつたら！」

私はかう繰返して考へた。

二階の笑聲が烈しく私の神経を顫動させた。私はぶるぶる體を戦はした。私はまた掻巻

をかぶつて、眼を大きく闇の中に明いて、そして天井を見てゐた。

天井にはいろんなものが映つて見えた。女の顔だの、客の顔だの停車場だの、掌車だの、灸を据ゑてゐる中婆さんだの、東京の細君だの……。暮れてから久しく経つても誰もランプを運んで來るものはなかつた。

二階の騒ぎが止んだと思ふと、そつと入つて來たものがある。女だ。

「お客が多うてナ」

かう言つて、長い間、闇の中に女は坐つてゐた。

「およれはん！」

かう呼ぶ聲がする。

女は返事もせずにある。

「およれはん！」

その聲が遠くて聞えてゐる。

暫くすると、廊下を傳つて、此方に來る足音がする。障子の外から、

「およれはん！」

返事をせずにある。

「おれほん、るまへんか？」

「居ないよ」

かう私が言ふと、「何處へ行きやはつたか」とつぶやきながら、向ふに行つて了つた。女は莞爾笑つて搔卷の中から顔を出した。

「いゝえの——」

かう言つて、女は頭を振つて泣いてゐた。

私は急いで旅行案内を鞆かばんから出した。それは五日目の夕方であつた。客は三組ほど来てゐた。

私は旅行案内の頁を繰つた。

「こんな痛い、つらい思をしてゐるよりは、此處を發つて行く方が好い。さうだ！ 發たう。」汽車の時刻を見て、「五時四十分發の名古屋行がある。名古屋で待たなければならぬが、此處で痛い辛い思をして金なして待つてゐるよりも、寒くつても、ブラットホームの方がまだ好い。さうだ、女の聲を聞いて、こゝにかうしてゐるよりは好い」

私は手を鳴した。

別な女が来た。

「發つかられ、勘定して呉れ」

「お立ちになるんですか」

喫驚したやうな顔をして此方を見てゐる。肥つた女だつた。

「發つんだ！」

ツケを持つて来た盆の上に、銀貨がチャラチャラした。

寧ろ女に逢はずに別れやうと思つて、私は裏の方に靴を廻させた裏の土蔵の傍には、大きな椿の樹があつて、濃い緑の葉の中に赤い花が一杯に咲いてゐた。

しかし、女はいつか其處に来てゐた。女は黙つて鞆を持つた。

編上げの靴紐を私が丁寧に結んでゐる間、女はぢつとして其處に立つてゐた。

二三人の女は送つて出てゐた。

「御機嫌よう——」

さういふ聲を後に、逃げるやうにして私は出て行つた。實際通げるやうに——總ての辛い痛い刺戟から、三味線の音から、女の笑聲から……。

土蔵の傍を通つて行つた。其處では男が米を搗いてゐた。

私は黙つて歩いた。女は鞆を持つたまし私の後について來た。

裏の垣から向ふに出ると、向ふは丘になつてゐて、その上に小さな停車場が見えてゐる。碧い空を背景にして、くつきりと見えてゐる。

丘の上に路がうね／＼とついでゐる。

五日前に、闇の中を轉びながら辿つて來た路だ。さういふ生活が私の前に待つてゐるとは知らずに遣つて來た路だ。麥が青く見えてゐる。

女の下駄の足音を後に聞きながら、私は振返りもせずにサツサと歩いた。

ふと、「まア、大變ヤ」といふ女の聲が後にした。

振返ると、女は鞆を地上に落してまごまごしてゐた。鞆の手のクワンが取れたのであつた。

私は二足三足引返した。女は今度は鞆を抱へるやうに持つて、取れた鞆の手を私に渡した。

「こんなになつて……」

笑ひながら女が言つた。

「好いよ、好いよ。持たうか」

「ようおます」

かう言つて鞆を抱へながら女は猶丘の細い道を歩いて來た。私達の間は一問位離れてゐた。

停車場前の大和障子の家の前には、白粉を塗つた女が立つて、笑を含んで此方を見てゐた。停車場に入らうとする時、私は手に持つてゐた鞆の手を外套の隠袋に入れた。

停車場には五六人の乗客が待つてゐた。大きな包を持つてゐる行商らしい男などもゐた。誰もかれも白粉をつけた白い襟をした女の方を珍らしいさうに見た。

「もう好いよ、有難う！」

私はかう言つた。しかし女は歸らうとしなかつた。

私は財布を掻き廻しながら、辛うじて東京までの三等切符を買つた。あとを見ると、もう三十錢位しかない。辨當を買ふにも足りない。煙草を買ふ餘裕などは勿論ない。——やがて時間が來た。私は鞆を女から受取つて、そして改札所の方へと行つた。

【上りは向ふ側】

かうその若い車掌が言つた。私は鞆を抱へて線路を向ふに渡つて行つた。

向ふ側から見ると、女は改札所の櫛のところに身を凭せかけて、白い顔を此方に見せていつまでもいつまでも立つてゐた。

ゴオと音がして下りが先きに入つて来た。

女は笑ひながら軽く首を下げた。私も挨拶した。私は別れの情を此時ほど深く強く感したことはない。

女のさびしきうに歸つて行くのが此方から長い間見えてゐた。背の高い姿が夢の青い畠の中に靜かに動いて行く光景は……いつまでも……いつまでも……私の生きてゐる中はいつまでも……。

その停車場から東京まで。それも私に取つては忘れられない旅だ。

名古屋の停車場で、私は空腹をかゝへて、三時間ほど待つた。そしてその揚句は、長い長い珠数つなぎを餘儀なくされて、三十分近くも重い鞆を抱へて立つてゐた。

西鶴の「置土産」の中に「物参りの精進を打ちやぶりて、もめん腹道具に侘びながら、

太夫に逢ふ心地して又下向にもたはふれ、お初尾ののこりを有切に取らせ、山崎よりの舟ちんなくてひろひわらち 歩行路、中食なしにかへりぬ」かう書いてあるが、私はそれを何遍汽車の中で思ひ出したか知れなかつた。

三等の狭い腰掛に押附けられて、眠るにも眠られず、起きるにも起きられず、冷めたい硝子に顔を寄せかけて、そして恍惚と長い間を旅して行つた。

空腹と、窮屈な場所と、人の旨さうに吸つてゐる煙草の煙と、女の顔と、辛かつた別れとの一緒、漲つて行つたやうな旅だ。

その停車場を私はその後一度通つた。

年月は最早かなり隔つてゐる。少くとも五六年は過ぎ去つてゐた。その時私はある女と一緒に二等室にゐた。それは髷の長く出た襟足の白い女だつた。私は高貴織の羽織を着て、中折帽をかぶつて軽く夏外套を引つかけてゐた。秋の初めて、まだ、少し暑かつたがそれでも女はもう袷を着てゐた。

車室には、日影が左から差込んで来てゐる。汽車の中に、仲賣の店があつて、そこから林檎だの水蜜桃だのをボウイが買つて来て呉れた。

女はさも咽喉が乾いたといふやうに旨さうにして水蜜桃の汁を吸つた。

「何うしたでせう？其女は？」
かう女は訊いた。

「何うしたかわかりやしない」

「もう、おませぬね」

「おやしないさ、しかし、姉がゐる筈だから、さがせば分らんことはないね」

「お探さないよ」

女は笑つた

山と山との間を全速力を出して駛つてゐた汽車は、段々遅く遅くなつて、次第にその小さい停車場に近づいて行つた。山には雲がかゝつて、碧い谷川の水が帯のやつに流れてゐた。私は車窓から顔を出してゐた。

停車場の向ふには矢張りその大和障子が見えて居た。しかしそこにある車掌はもうその若い車掌ではなかつた。一人か二人乗客が下りて、そしてすぐ汽車は出た。

上りの来るのを待ちながら、女のさびしさうに歸つて行くのを私の見送つたブラツトフオムは、依然として昔の儘であつた。そこには午後の日影が明るく當つてゐた。

女が鞆を落した丘の道には、子供が二三人遊んでゐた。向ふから荷を擔いだ行商らしい

男が急いで登つて來た。で、山も川も忽ちにして過ぎて行つた。

「でも、そんなにいつまでも思つてゐるもんですか」

元の席に私の歸つて來るのを待つて女は訊いた。

「別だね、そればかりは——。自分にも不思議に思はれる位なんだから」

「女は忘れて了つてゐるわね、もう……」

「さうだらう、もう忘れてゐるだらう。僕が今行つて逢つたつて、さうでしたらね位のものだらう。……しかし不思議だね。それが生涯僕について廻つてゐるんだから——」

「貴方、屹度執念深いわね……」

女は笑ひながら言つた。

「いや、執念深いツて言ふのとは違ふよ。……その證據には、他に長い間關係した女があつても、さういつ迄僕の體の中に残つて生きてゐるものは少ないから」

「何處か氣の合ふところがあつたのね」

私は黙つてその女のことを考へてゐた。汽車は谷川に添つた崖のやうな高いところを駛つてゐた。

その常座、私はその女のことばかり考へてゐた。

金貯めて、そして、もう一度是非行つて見よう。かう思つて私は働いた。新橋を夜の急行で發せば、明日の正午頃には逢へる。ふいと出かけて行つたら、さぞ喫驚するだらう。喜んで呉れるだらう。私はそんなことばかり考へてゐた。

籠屋に預けて来た時計は、此方から偽替で金を送ると、すぐ届けて来た。小さなポール、管の中に、綿で動かさないやう、丁寧に包んであつて、表には拙い手蹟で、此方の名宛が書いてあつた。時計の鎖がチャラチャラした。

「よくそれでもなくなりませんでしたね」

何も知らない細君は、其時、かう言つて、その時計を手に取つて見た。

その時計は十二三年も私と一緒にゐた。戦争にも行つた。旅にも行つた。女を訪ねる時刻は私はよくそれで見つた。床の下に置いたのを探つて、

「あゝ、もう十時だ、歸らなくつてはいかん」とか、「もう十一時だ、車で行つても電車に間に合はない。仕方がない、泊つて行きます！」とか言つた。小さな亂れ箱の中に女の櫛と懐鏡と一緒に入つてゐることもあれば、黒蠟燭の茶湯臺の上に敷島などと並んで置かれてあることもあつた。かと思ふと、毛氈の敷かれた机の上に蓋を明けたまゝ、三日も四日

も載せられてあることもあつた。

「この鎖も随分古いわれ」

などとある女は言つた。

「一つ新しいのを買いなさいよ。」

かうある他の女は言つた。

「でも、記念物だから」私はいつでもさう言つて、矢張、その時計を帯に巻きつけてゐた。その時計のがげにはその女がゐた。

その時計の蓋の裏の煌々するところを見詰めてみると、女の顔が分明と眼の前に浮び出して来た。

「私のやうなものはない……何も出来まへんからな！」

其女は笑つてかう言つてゐる……。

硝子窓——二階の硝子窓だ。

桃だの、櫻だの、椿だののチラチラ映る二階の硝子窓だ。その窓の下で、早はよくその

女のことを考へた。晴れた日には、朝日が當つたり、白い雲が映つたり、早く掠めて飛んで行く鳥の翼が映つたりした。その前には、菜の青々とした畠が見えて、物干竿には女のキヤラコの白足袋が干してあつた。

畠を隔て、四目垣が見え、山吹の綺麗に咲いてゐるのが見え、びつしやりと閉つた障子が見えた。そこに晩春の雨がザンザン降つてゐる。「もうこれで今年の花もおしまひだ！」かう誰かが言つてゐる。

私は椅子に腰をかけて、卓に身を凭せて、そしてぢつとその降り頻る晩春の雨を見てゐる。花が泣いたやうに濡れて、緑葉がざわざわと風で動いてゐる。ふと、前の家の障子が明いて、其處から娘が出て来た。背の高い、頬の豊かな、肌の綺麗な女だ……。

女は厠に行つたが暫くして其處から出て来た。手水鉢で手を洗ひながら、ぢつと降り頻る雨を見てゐたが。そのまま障子を明けて一室の中に入つて行つた。閉めたあとの障子はさびしく白く雨の中に見えてゐた。

何うかすると、午前など、女は鏡臺を座敷の真中に持ち出して、一生懸命で髪を結つてゐることなどもあつた。それはきまつて暖かい晴れた目で、障子が大抵明け放されてあつた。……白い腕が長く延びて、庇髪のふくらみ加減を一生懸命に女は見えてゐる……。花と

緑葉とが私の硝子窓に明るく映る。

髪が出来て了ふと、女は一閑張の机の角に斜に品をして坐つて、巻紙を片手に取つて、そして手紙を書き出した。長い長い、いくら書いても書き盡されないやうな長い手紙だ。

移はそれを見ながら、遠い女を絶えず頭に浮べてゐた。遠い女と手紙を書いてゐる女とが私の眼の前を行つたり來たりする……。二人の女が重なり合つて見える……。

その硝子窓はある朝小さな光景を私に見せた。それは夏の朝であつた。朝顔の咲いたのが深い朝霧の中に灰かに見えてゐた。私は早く起きて卓に向つてゐた。

向ふの家の兩戸——手水鉢の置いてある方の兩戸が一枚ずつと靜かに明いた。と思ふと派手な模様の長襦袢を着たまゝの姿で、眠むさうな眼付をして、娘は男の胸下駄を持つて來てそこに並べた。

願はハイカラに分けた、色の白い男が、ステツキを持つてやがて續いて出て來た。

女は兩戸に凭りかゝつて、疲れたやうな青白い顔を此方に見せてゐた。髪の亂れたのを指でかき上げたりなどしてゐた。

何か二言三言言つたと思ふと、二人の手はいつか堅く握り合はされてゐた。女の延した

白い腕が長く見えてゐた。

やがて男は庭の小さな折戸を押して静かに外に出て行つた。女は雨戸に凭りかゝつて、その見えなくなるまで見送つてゐたが、そのまま家の中に入つて行つた。男の歸つて行つたとの曉をこれから静かに眠らうとするのだらう。私は一枚明いたまゝになつてゐる雨戸を見ながら、遠い女のことを考へてゐた。

旅籠屋の庭の石燈籠につゞいて、海に近い綺麗な一間が見えた。松の鳴る砂山を向ふに出ると、碧い海の上には、大きな鼠色の鳥が横つてゐた。

「佐渡だ！」

私はかう言つた。

旅籠の長い廊下には奇麗なお酌と若い藝者とが客に伴られて來てゐた。三味線の音が其處にも此處にも聞えてゐる。——私は海に近い小さき停車場で汽車を下りて、なにがしホテルと書いた門を入つて、松の鳴る長い坂を登つてそして其處に來た。

私は女中に頼んで、特に隣に客のゐないやうな室を選んで貰つた。それは冬で、今まで晴れてゐた空がすぐ雪になつて了ふといふやうな日であつた。夏ならば、さぞ眺望が好いだらうと思はれるやうな海に臨んだ室も、明り取りに處々に硝子をはめた雨戸ですつかり

閉められて、一間の中は何となく陰氣で薄暗かつた。女中はやがて櫓を運んで來て、火燧をこしらへて呉れて、

「寒う御座んすから」

かう言つて蒲團をかけて呉れた。

私は火燧に當りながら、ひとり静かにいろいなことを思ひめぐらしてゐた。風が凄しく松を鳴らして、一間先も見えないほど雪の降頻りてゐるのが明り取りの硝子窓から見える。波の音も高く聞える。

静かな、薄暗い一間の空氣は、私をしてそのまま深い沈思に耽らしむるに過してゐた。私はいつがその女のことを思ひ出してゐた。……長い廊下に軽い足音を立てさせて一歩一歩此方に近いてゐるのはその女ではないか？ といふやうな柔らかな静かな心持になつてその女中は静かに障子を明けた。

その夜は風呂の鐵砲が壊れたとかで、夜になるまで私は湯に入ることが出来なかつた。その訛を女中は度々言ひに來た。女中は火燧板の上に膳を据ゑて、古風な籠行燈を傍に置いて、そして飯の給仕をした。行燈には誰か悪戯をしたのか、「……行燈に残せし針のあと」といふあの古い小唄が書いてあつた。

私はいろいろな話をした。女中はつゝまじやかに、小聲で答へながら絶えず莞爾してゐた。私はその遠い昔の女が女中と私との間に立つて笑つてゐるやうな気がした。「私のやうなものばな」かう言つて私の顔を見てゐるやうな気がした。

暗くなつてから、私は湯殿に行つた。小さな風呂桶には白い湯気が立つて湯が一杯に漲るやうにわいてゐた。棚の上に置いてあるランプの光線は、静かに落着いた感じを四邊に漂はせてゐた。私は手づから傍にある桶の水をうめて、そして風呂の中に入つた。湯がザアとこぼれた。焼けて熱してゐた鉄砲はじつといふ音を立てた。何處か遠く離れた室で靜かに三味線が聞えてゐた。

私はその夜ほど遠く離れた山の中の女を思つたことはなかつた。何たるセンチメンタルな心の状態だらう。かう思ひながらも、私は湯上りのほつとした暖かい體を火燧に寄せながら、その黒い眼やら濃い髪やら、白い肌やらを歴と眼の前に浮べてゐた。

女中が入て黙つて、床を敷いて、「おやすみなさいまし！」と言つて、靜かに障子を明けて出て行くのを私は見てゐた。

廊下を歩いて行く軽い足音が續いて聞えた。外では海が凄しく鳴つてゐた。私の眼は時々海岸に沿つた路を見てゐた。

其處を私は歩いてゐた、椿の赤い花が一杯に咲いてゐたり、汐入川が靜かに海に流れ込んでゐたりした。

上つたり下つたりする三里の道だ。春先の暖かい日影に波が光つて、すぐ前に大きな黒い鳥が見えてゐた。

何年経たか、もう私は忘れてゐる……しかしその路ははつきり今も眼の前に見えてゐる。そこであつた田舎の婆、椿の樹の傍で網をつくらつてゐる。年取つた漁師、鼻を垂した子を負つてゐる子守娘、それが皆はつきり眼の前に見えてゐる。何故だらう？ 私はその三里の路を絶えずその女を思ひながら歩いて行つた。

賑やかな町、毎日、私の通つて行く町の右側だ、雑誌屋があつたり、菓物屋があつたり砂糖屋があつたりする處だ。塗物屋の若い上さんの丸醫の手絡がいつも私の眼につく通だ。

その通りでも、私はよくその遠い山の中の黒い眼の女を思ひ出してゐた。

何うなつて行く生活だらう。この六七年の間にも、私の知つてゐる人は幾人死んで亡びて行つたか解らない。幾何の悲哀、幾何の涙が人の袖の上に灑がれたかわからない。私はまた私で、いろいろな心の變遷に逢つて、自分でも自分の心持の變りやうの劇しいのに驚

いてゐる位である。女は女に重なり合つて私の眼の前に見えてゐる……。熱い心は熱い心と纏れ合つて私の前を通つてゐる……。笑つたり泣いたりしてゐる自分の姿が其處にも此處にも見える。

センチメンタルな空想だ、しかし、私は今だにその女に逢ふ機會のあるのを待つてゐる。「眞面目な心持で待つてゐる。眞剣で待つてゐる。私のやうなものにはナ——」かう言つてにこり笑ふその私をいつか再び見ることが出来ると思つてゐる。

そんな空想は實現されたためしはない。かう人は言つて笑ふかも知れない。寧ろ言ふにきまつてゐると言つても好い位だ。けれど、そんなことは私には問題ではない。私に取つては、その女は絶えず生きて動いてゐる。その女の髪は艶々としていつも黒く見えてゐる

—、
私は今日もその女の柔かな姿を頭に思ひ浮べながら、いつもの低い坂を靜かに登つて行

大正三年十月二十日印刷
大正三年十月廿三日發行

(定價拾錢)

著者 田山花袋

發行者 植竹喜四郎

東京市神田區佐久間町四丁廿三番地

印刷者 細萱武四郎

東京市芝區琴平町三番地

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地



發行所

東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三 電話下谷三四一九

植竹書院

植竹文庫第一編

本文庫は世界的の名著中、雄編大作のみを収め之を六號活字にて縮刷す

新刊 縮刷 サニン 全

上下 合本 新形總布 極美本 定價九十錢 (郵税八錢)

■讀賣新聞評・アルツイバシエヴの傑作サニンの翻譯である、原著者が多年心血を絞り得たこの勞作の効果が惜しくも露文壇に於て、發賣禁止の厄に逢つた程人間の自然の性情性慾を忌憚なく描破し盡した一代の傑作たることは今更めかしくいふまでもないが、今無想庵氏の翻譯によつてこの傑作が日本の文壇に移植されたことは慶賀すべきことである。氏の譯此の機微の消息を遺憾なく流露し得てその内容よく生効しきながら原作の情調に描する觀がある。

内容の豊富と價格の低廉

本書は全六號活字にて一頁壹千字乃ち菊版二頁に匹敵する内容を有す。故に廉價なる事、吾が文明叢書を除きて本文庫に優るものなし。

明文叢書

第一編	カイゼル	福本日南著
第二編	サロオメ	ワイルド作 生田長江譯
第三編	決闘	チエホフ作 小山内薫譯
第四編	マダ	ズーデルマン作 藤澤古雪譯
第五編	馭者ヘンシエル	ハウプトマン作 秦豊吉譯
第六編	朝顔	鈴木三重吉作
第七編	戀を知る頃	谷崎潤一郎著

明文叢書

第十一編
第十二編
第十三編

飛行機

廣部工學博士序
德永理學博士著
早大工學士著

第十四編

ラジウム講話

ソヂイ教授著
永代靜雄譯

自第十五編
至第十九編

全譯 古城の秘密

モールルス著
岡村千秋譯

自第二十編
至第二十三編

全譯 ドリアン・グレー

ソイルド作
佐藤春夫譯

第二十四編

心中未遂

正宗白鳥著

第二十五編

ぼんち

岩野泡鳴著

第二十六編
第二十七編

全譯 露西亞印象記

ブランデス作
中澤臨川譯

明文叢書

第二十八編

全譯 キ

ツス

チエホフ作
廣津和郎譯

第二十九編

六月

相馬泰三著

第三十編

踊

森田草平著

第三十一編

樂園

田山花袋著

第三十二編

四十女

德田秋聲著

第三十三編

山吹の花

田村俊子著

第三十四編

桐屋

後藤末雄著

文 明 叢 書

第三十五編

全譯 夕

イ

ス

フナトール作
谷崎精二譯

第三十七編

全譯 獄

中

記

オスカ！作
廣津和郎譯

第三十八編

全譯 ウキルヘルム・テ

シレル作
舟木重信譯

第四十編

全譯 變愛と道德

エレン・ケー作
金子筑水共譯
田制佐重

第四十二編

全譯 父

ストリンドベルヒ作
橋田東聲譯

第四十三編

全譯 オピウムエーター

ド・クキンセイ作
辻潤譯

第四十五編

全譯 暗

の

力

トルストイ作
林鷗南譯

274
1029

終

